

《翻 訳》

ジョアン・ドス・サントス『エティオピア・オリエンタール』(1609年,  
エヴォラ刊)を初版本テキストから訳注する試み  
——トロント大学トーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリー所蔵本に  
もとづく再検討(承前)——

Uma nova tentativa da tradução integral japonesa baseada na  
editio princeps da obra *Ethiopia Oriental* (Évora, 1609), da autoria  
do frei dominicano João dos Santos, reservada na Thomas Fisher  
Rare Book Library, University of Toronto.

日埜 博司(HINO Hiroshi)

ポルトガル人ドミニコ会士ジョアン・ドス・サントス(Frei João dos Santos, O.P.)が執筆し1609年にエ  
ヴォラで刊行された『エティオピア・オリエンタール』(*Ethiopia Oriental*)という大著がある。サン  
トスは16世紀末から17世紀初めにかけて永年にわたり、東アフリカの各地と、ゴアを中心とする  
エスタード・ダ・インディア(東洋におけるポルトガル勢力圏)でカトリックの布教に従事した。

『エティオピア・オリエンタール』第一部は、16世紀末東アフリカの諸地域を包括的に扱うエ  
スノロジーでありエスノグラフィーである。それぞれ民族誌および民俗誌と訳すのであろうが、  
サントスの論ずるテーマは、歴史、人文、地理、風俗、習慣、民俗、自然、動物、植物、鉱物、  
宗教、迷信、等々、はなはだ広範であり、現地を見聞したサントスならではの知見やエピソード  
が随所にちりばめられ、まことに優れた博物誌の相貌を帯びる著述、と評することができる。

別の地域を布教したドミニコ会同僚の著述——たとえば16世紀半ばの明帝国に到達し、  
短期間ながら華南の広州でカトリック布教を行なうという先駆的な経験を有したガスパール・  
ダ・クルスのシナ総論というべき『中国誌』——から幾つかのくだりが引用され、種々の「異な  
れるもの」を比較文化論の手法で考察しようとする視点が、ときおり持ち込まれていることが、  
訳者には興味深いのだが、上記と並んで、カトリック宣教師らしい叙述法として指摘しうるのが、  
エティオピア・オリエンタール(東アフリカ、特に東南アフリカ)に暮らす人々の習俗を論ずるにあたり、  
サントスはときおり、聖書に見えるエピソードなり伝承を引き合いに出し、これまた〈比較文化  
論〉的手法で、みずからの記述へある種の説得性を与えようとしていることであらう。

たとえば、前回訳載した箇所であるが、カフル人のうちモッセゲージョと呼ばれる種族が、  
戦功のあかしとして、斃<sup>たお</sup>した敵の男根を切り取る、という習俗を有することが紹介される。ところが、  
『サムエル前書』第18章(サントス曰『列王記 上』)に見える記述としているが、これはサントスの記憶違い)

に登場するダヴィドのエピソードからは、モッセゲージョ族がやらかすのと大して変わらぬ行為をダヴィドが遂行したことを、我らは知ることになる。

イスラエル初代の王サウルが、その娘ミカルをダヴィドに嫁がせるその条件として、サウルはダヴィドに対しペリシテ人を殺し、その陽皮(男性器の包皮)100枚を持ち帰れ、という命令を下す。殺した相手が、割礼を施したヘブライ人ではなく、これを忌み嫌うペリシテ人である、ことを明示する証拠として、ペリシテ人の陽皮を持ち帰るよう、サウルはダヴィドに命じたのだ。そしてダヴィドは、サウルの期待をはるかに凌ぐ“戦功”を立てる。

戦功のあかしとして、斃した敵の男性器を利用する、という発想ひとつに関する限り、ダヴィドはモッセゲージョ族から、遠く隔たつてはいない。聖書に記載されたこの種の〈残虐〉行為を一方で正当化し、カフル人の同種の振舞いをのみ非道・残虐視するという態度は、どう考えても公平さを欠くであろう。

今回紹介する一節に登場するのは、『士師記』に登場するエフタ(ポルトガル語読みではジェフテ)のひとり娘。エフタは、アンモン人との戦いに臨み、神ヤーウエ(ポルトガル語ではデウス)に対し、ひとつの誓いを立てる。アンモン人に勝利し、みずからの家に戻ったとき一番に迎えに出た者を、ヤーウエに捧げるという誓いである。アンモン人を破り、みずからの家へ戻ってみると、はたしてまっさきに現われたのは、エフタのひとり娘であった。エフタはこれを悲しむ。しかしヤーウエに立てた誓いは、反故にはできない。娘からもそう説得され、エフタは彼女をヤーウエに捧げる。こうして、エフタの娘はヤーウエに仕えつつ、生涯処女の貞潔を守って暮らすのだが、彼女は、それにさきだち2ヵ月の“猶予”を願い出る。エフタの許しを得、彼女は、友人とともに山にこもり、みずからの子孫を残す道が絶たれたことを、嘆き、悲しむ……。

この、エフタの娘のエピソードと対照されるのが、「キズンゴ河のマクア人」のうち「処女の娘が彼らの仲間内で結婚する」に際してのエピソードである。

前者が、処女のまま生涯を暮らす定めとなったのを嘆くのに対し、後者は「まもなく処女の貞操を失うことを悔やみ、悲しむ」という違いはあるものの、その嘆きの場所が、人里離れた山や密林であったり、信頼を置く友人と別れのひとときを過ごす、などは共通している。聖書の伝承を引き合いに出すことにより、マクア族カフル人の未知の習俗を、読者の脳裡にわかりやすく髣髴させようとしたのであろう。

浩瀚な原著であるが、訳者は16世紀末東アフリカの諸国・諸地方の事物を扱う PRIMEIRA PARTE(第一部)の完訳をめざす。

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタール』初版本を、いささか不可解なのだが、ポルトガル国立図書館(Biblioteca Nacional de Portugal)は一部も所蔵しておらず、ゆえに同館デジ

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタール』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み  
タルアーカイブスで閲覧することもできない。訳者はそこで下記の校訂本に依拠し翻訳を進めてきた。

Fr. João dos Santos, *Etiópia Oriental e Vária História de Cousas Notáveis do Oriente*,  
Introdução de Manuel Lobato, Notas de Manuel Lobato & Eduardo Medeiros, Fixação do  
texto por Maria do Carmo Guerreiro Vieira (coord.), Célia Nunes Carvalho & Maria  
Amélia Rodrigues Coelho, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos  
Descobrimentos Portugueses, 1999, 759 ps. (以下、CNCDP 版と略称する)

この校訂本は有益かつ詳細な解説に加え、テキスト全篇にわたり重厚な脚注が施され、和訳を進めるに際し、十全の信頼を託すに値するもの、と評してよい。

訳者は『エチオピア・オリエンタール』のおもしろく、価値ある内容に魅了されてよりこの方<sup>かた</sup>、その初版本にアクセスしたいと思いつつ、ポルトガル国内でそれが叶わぬもどかしさを募らせてきたのだが、過日、カナダはオンタリオ州の名門トロント大学(University of Toronto)のトーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリー(The Thomas Fisher Rare Book Library)に、『エチオピア・オリエンタール』1609年刊初版本(*editio princeps*)が所蔵され、しかもそれがトロント大学のスポンサーシップによって全巻デジタル化されているとの情報に接した。

下に示すのは同書の扉。そこに記されている文言を和訳ともども記す。



トロント大学トーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリー蔵『エチオピア・オリエンタール』初版本 (*editio princeps*) 扉

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタール』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

ETHIOPIA ORIENTAL,  
E VARIA HISTORIA DE COVSAS  
notauéis do Oriente.  
COMPOSTA POLLO PADRE FR. IOAÕ  
dos Santos da Ordem dos Pregadores,  
natural da Cidade de Euora.  
DIRIGIDA AO EXCELLENTISSIMO SENHOR  
Dom Duarte Marques de Frechilla & Malagon, &c.  
Impressa no Conuento de S. Domingos de Euora.  
Com licença do S. Officio & Ordinario  
& Priuilegio Real. Anno 1609.  
POR MANOEL DE LIRA IMPRESSOR.

エチオピア・オリエンタールおよび東方の注目すべき事物に関する多様性に富む物語。説教者の修道会〔ドミニコ会〕に属しエヴォラに生まれたるパードレ・フレイ・ジョアン・ドス・サントス、これを編纂す。この物語をいとも高邁なる君にして、フレチーリャおよびマラゴーン等の侯爵ドン・ドゥアルテへ献呈す。エヴォラのサン・ドミンゴス修道院において印刷。宗教裁判所および上長の允許<sup>いんきよ</sup>、さらに王室より賜<sup>たま</sup>わりたる特権をもって。1609年。

印刷者マノエル・デ・リラによりて

トーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリーは、ポルトガル語で印刷され上梓された貴重書を 921 点含む。特筆すべきことに、その冊数は、英語、イタリア語、フランス語文献のそれに次ぎ、イスパニア語のそれを遙かに凌ぐ。ライブラリーに含まれる典籍のタイトルをざっと一覽したところ、トーマス・フィッシャーは、特に大航海時代に上梓されたポルトガル語文献に焦点を絞った古書蒐集<sup>しゅうしゅう</sup>を行なったわけではないようであった。

トロント大学の見識<sup>みんこ</sup>に満腔の敬意を表しつつ、『エチオピア・オリエンタール』1609年刊初版本の影印を訳出箇所に限って掲げるとともに、そのテキストを改めて仔細に読み込み、今回は第一部第3巻、モサンベーク関連の最初の5章を和訳し、解説と注釈を施してみる。和訳の直後には CNCDP 版のテキストも掲げる。

第3巻冒頭に置かれたタイトルを原文の体裁に従って示し、和訳を附しておく。

LIVRO TER  
CEIRO, DA ETHIOPIA  
ORIENTAL, EM QVE SE DA RELAÇAM DA  
Ilha, & fortaleza de Moçâbique, & do Maurûça Rey da terra

firme, que está defronte, & seus costumes, & das ilhas  
de Quirimba, até o Cabo Delgado, & seus habita-  
dores, & cousas muy notaueis,  
que ha nesta costa.

『エティオピア・オリエンタール』〔第一部〕第3巻。ここではモサンビークの島および要塞、〔島の〕正面に広がる大陸の、その王マウルーサと彼の習俗について、また、カーボ・デルガードまで連なるキリンバ諸島と、その住民について、さらに、当海岸一帯に存在するたいそう注目すべきことがらについて報告を行なう

#### CAPÍTULO I (Primeira Parte, Terceiro Livro)

### **Dos cafres macuas da terra firme de Moçambique, e de seus costumes, e de como conquistaram aquela terra.**

第1章(第一部第3巻) モサンビークの大陸側に住むマクア族のカフル人と、  
彼らの習慣について。また彼らがかの地をどのように征服  
したか

クアマの諸河川〔ザンベジ河口〕からモサンビーク島へ到るまで悠々と延びてゆく当〔モサンビーク〕沿岸のすべて——陸沿いに130レグアある——には、たとえば第1巻および第2巻で論じてきた連中の如き、強勢にして偉大な王はいない。同沿岸には多くの領主や王の家来が存在するが、誰ひとり王の称号を有する者は、いない。ただし海沿いに小さな集落を構えて暮らしを営む幾人かのムスリムがおり、こうしたムスリムは同地の王だと自称している。彼らはその昔、たとえばソファーラやズーフエの王であったという。彼らばかりかその家来たちを、ろくに分スタンシア別も持たぬペロ・ダニヤアが殺害してしまった。当地の内陸深く入り込むと、〔海岸とは異なり〕ようすが変わる。幾人かの偉大にして強勢なる王たちが暮らしているのだ。彼らは異教徒のカフル人であり、毛髪はちりちりで、その大半はマクアという種族に属する。今私が少々述べねばならぬと思うのが、モサンビークの住人が交渉を持ち隣人たることを余儀なくされているのがマウルーサだ。

Em toda esta costa que vai correndo dos rios de Cuama até à ilha de Moçambique (que são cento e trinta léguas de terra), não há reis poderosos, e grandes, como são os de que tenho tratado

no primeiro e segundo livro. E posto que haja nela muitos senhores de vassallos, contudo nenhum deles tem título de rei, inda que alguns mouros há que vivem por esta fralda do mar em povoações pequenas, os quais se chamam reis dos mesmos lugares em que vivem, e são como antigamente era o Rei de Sofala, Zufe, a quem matou Pero d'Anhaia, de pouca sustância, e vassallos. Mas polo sertão dentro desta terra vivem alguns reis grandes, e poderosos, cafres gentios de cabelo crespo, os quais pola maior parte são macuas de nação. Um deles que agora se me oferece, com quem os moradores de Moçambique tratam, e vizinham, é o Mauruça, de quem me pareceu devia dizer aqui alguma cousa.

モサンビークの<sup>テラ・フィルメ</sup>大陸側に暮らすカフル人はマクーア族である。彼らは異教徒であり、いとも野蛮でむごい盗賊どもだ。マウルーサと呼ばれる者が彼らの王である。このマクーアという種族には、すでに数度言及したことがあるが、私が当[モサンビーク]海岸で見してきた、カフル人の種族もろものうち最も野蛮かつ最も<sup>しょうわる</sup>性悪な連中だ。彼らの話しぶりはすこぶるやかましく、粗野で、まるで喧嘩をしている人のようだ。だから私が初めて彼らのしゃべっているところに出くわしたとき、連中ははっきり喧嘩をしているのかと思ったものだ。皆、普段から、上の歯にも下の歯にも<sup>やすり</sup>やすりをかけ、釣り針の如く尖鋭ならしめている。鋭利な鉄器を用いてみ<sup>からだ</sup>ずからの肉を切り裂き、身体中に彩色を施す。

#### マクーア族のカフル人はお洒落として、顎の両側に穴をあける

彼らは<sup>あご</sup>顎の両側に穴を開ける。穴を開ける範囲だが、両耳の先から口もとまで。それぞれの側に3つか4つ穴を開け、それらの穴には指が一本入るほどだ。穴をとおして<sup>はぐき</sup>歯茎や歯が透けて見え、穴づたいに口内からの<sup>たえき</sup>湿り気や唾液が滴っている。さらにまた、彼らは<sup>しゃれ</sup>お洒落のつもりで、こうした穴ごとに木または<sup>しんちゆう</sup>真鍮の<sup>は</sup>栓を嵌め込む。嵌め込みやすいよう、木や真鍮は丸くしてある。真鍮づくりの栓で装うことのできる連中は、より裕福と見なされ、より費用をかけた<sup>みづくろ</sup>身繕いをしている、と評価される。彼らのあいだでは真鍮の価値がすこぶる高いのだ。彼らはまた、両唇に穴をひとつずつ開ける。上の唇には細い木の棒を差し込む。木の棒ではあるが、一見したところまるで鶏の羽である。長さは1デドある。彼らはこの木の棒を外へ向かいまっすぐ延びるように差し込んでいる。そのさまはまるで釘だ。下の唇には真鍮製の大きな栓をぴたりと嵌め込んでいる。この栓はたいそう重く、そのため下の唇は<sup>あごひげ</sup>ほぼ顎鬚まで垂れ

下がる。というわけで、彼らの菌茎や、やすりをかけた歯は常時丸見えであり、悪魔もかくやと思われるような外貌だ。さらに彼らはすべての耳に多くの穴を円い形に開けており、その穴に細い木の棒を数本差し込む。それらはまるで編み針のようだ。長さはこれも1デドあり、これによって外見はさながらヤマアラシとなる。彼らがこんな装いをするのはすべてお洒落として、またハレの装いとしてであり、それが証拠に、気分が悪いときや悲しいとき、彼らはこれらすべてを取り外してしまい、穴という穴から(栓)を引き抜く。すこぶる筋骨隆々とした連中であり、苦役をものともしない連中だ。男も女も裸で行動する。ハレの装いをするときは、サルもしくはその他のけだものの毛皮を持ち出し、これで腰から膝までを締めつける。そのほかすべての習俗や、立ち居振る舞いと暮らしぶり、肉体を何で維持するかや、生活を営む場所に関して言えば、上述したロランガのカフル人と彼らはよく似通っている。よって簡潔を尊び、それを繰り返してここに記すことを控える。私がこれまでに述べてきた習俗のかずかずは、密林に暮らす当海岸のカフル人すべてにはほぼ該当するものであり、本章で言及するマクーア人に特にそれは該当する。彼らには獣のような振舞いがあまた認められる。

Os cafres da terra firme de Moçambique são macuas gentios, muito bárbaros, e grandes ladrões. O seu Rei se chama Mauruça. Esta nação de macuas, de que já falei atrás algũas vezes, é a mais bárbara, e a mais mal inclinada que todas as nações de cafres que tenho visto nesta costa. O seu modo de falar é muito alto, e áspero, como quem peleja; e assi a primeira vez que os vi estar falando, cudei que pelejavam. Todos ordinariamente limam os dentes de cima, e de baixo, e tão agudos os trazem como agulhas. Pintam-se todos polo corpo com um ferro agudo, cortando suas carnes.

Furão as queixadas por galantaria.

Furam ambas as queixadas das pontas das orelhas quasi até à boca, com três ou quatro buracos de cada parte, por cada um dos quais cabe um dedo, e por eles lhes aparecem as gengivas, e os dentes, e lhes corre ordinariamente a humidade, e cuspinho da boca. E por esse respeito, e também por galantaria, trazem em cada um destes buracos metida ãa rolha de pau, ou de chumbo, que pera isso fazem redondo, e os que as podem trazer de chumbo são mais ricos, e tratam-se com mais custo, porque o chumbo vale muito entre eles. Também trazem dous buracos nos beiços: no de cima metem um pau delgado como ãa pena de galinha, de comprimento de um dedo, e ali o



trazem direito pera fora, como um prego, e no de baixo trazem ãa grande rolha de chumbo encaixada, tão pesada que lhes derruba o beijo quasi até à barba, e assi lhes andam sempre aparecendo as gingivas, e dentes limados, que parecem demónios. Trazem mais as orelhas todas furadas em roda com muitos buracos, e neles metidos uns paus delgados como agulhas de rede, de comprimento de um dedo, que parecem porcos-espinhos. E tudo isto trazem por galantaria, e festa, porque quando andam anojados, ou tristes deixam tudo isto, e trazem todos os buracos destapados. É gente muito robusto, e de muito trabalho. Todos andam nus, assi homens, como mulheres, e quando andam bem vestidos, trazem ãa pele de bugio, ou d'outro animal cingida da cintura até os joelhos. Em todos os mais costumes, tratos, modos de viver, sustentação, e lugares em que habitam, são muito semelhantes aos cafres de Loranga, de que já falei atrás, e deixo de o repetir aqui por abreviar. Estes costumes que tenho dito são de quasi todos os cafres desta costa, que vivem polos matos, e mais em particular destes macuas, nos quais se acham mais brutalidades.

#### キズンゴの河のマクーア族 / マクーア族女性の結婚

キズンゴ河のマクーア人に関しては、次のようなことが語られている。処女の娘が彼らの仲間内で結婚することになる。すると、娘は暮らしている部落の外へ出て密林へ分け入り、流浪者さながらに、そこで丸ひと月を暮らす。彼女はそのあいだしきりに、まもなく処女の貞操を失うことを悔やみ、悲しむ。この悲しみは、ジェフテ〔エフタ〕の娘が体験した悲しみとは、性格が異なる。ジェフテは、みずから立てた誓いに従い娘を犠牲に供しようとしていた。それを知った娘は、父ジェフテの許しを得、深山のただ中を 2 ヶ月さまよう。そのあいだ彼女は何かをしたか。女友達やおつきの女従者と一緒に、みずからが処女のままま逝かねばならぬ悲しみにひたすら涙したのだ。ジェフテの娘が泣き暮らしたのは、わが子を持たぬままま死んでゆかねばならぬからであり、これはジュデウ〔ユダヤ人〕の掟にあつてはすこぶる忌み嫌われることだ。ところがカフル女たちの言い分はこうだ。私らが悼いたみ悲しむのは近々〔結婚して〕処女を失うことだ、と。カフル女はこうした悲しみの心を示すため 30 日を過ごすのだが、そのあいだ、女友達や親族の訪問を受けたり、そうした人々に付き添われたりして日々を過ごす。夜ごと自分の家へ戻って眠れるし、朝になると今までどおりの〈流浪〉生活へ戻ることもできる。やがて次回の新月が巡ってくる。まさにその日、結婚させられる乙女、彼女の親族や友人一同は、盛大

なるお祭り騒ぎを催し、踊り狂う。<sup>レセビメント</sup>〈授受の儀〉が行なわれるのは翌日。それはすなわち乙女を新郎へ引き渡すことであり、それ以外何の儀式もない。キズンゴのカフル人は、パードレ・フレイ・トマス・ピントを捕まえその支配下に置いた連中だ。トマス・ピント師は説教者の修道会〔ドミニコ会〕の修道士であり、<sup>インキジドール</sup>インディアの元異端審問官であった。そのほかの同伴者ともどもこの河〔キズンゴの河〕へ辿り着いた。トマス・ピント師とその同伴者は、かのインディアの浅瀬<sup>1</sup>で座礁の憂き目を見たナウ船サンティアゴ号の遭難から命拾いをしたのだ。その模様についてはこのさき、より詳しく物語るとしよう。

Macûas do rio de Quizungo. / Casamêto das Macûas.

Dos macuas do rio de Quizungo se conta que, quando há-de casar algũa moça donzela entre eles, a mesma moça se sai fora da povoação em que vive, e se vai aos matos, nos quais anda toda ãa lua inteira, como em degredo, sintindo, e lamentando a virgindade que há-de perder; pranto bem diferente do que fez a filha de Jefté, a qual, sabendo que seu pai a queria sacrificar polo voto que tinha feito, pediu-lhe licença pera andar dous meses polos montes, chorando sua virgindade com suas amigas, e companheiras; mas esta chorava porque morria sem filhos, cousa que na lei dos judeus era mui abominada, e as cafras dizem que choram a virgindade que hão-de perder. Nestes trinta dias que as cafras tomam pera este pranto, podem ser visitadas, e acompanhadas de suas amigas, e parentes, e todas as noites podem vir dormir a suas casas, e pola manhã tomar a continuar o degredo, até que apareça a lua nova, no qual dia a mesma desposada, e seus parentes, e amigos fazem grandes festas, e bailos, e no dia seguinte se faz o recebimento, que é entregar a desposada a seu marido sem mais cerimónias. Estes cafras de Quizungo foram os que cativaram, e tiveram em seu poder o Padre Frei Tomás Pinto, religioso da Ordem dos Predicadores, Inquisidor que foi da Índia, o qual foi sobre este rio com os outros seus companheiros que se salvaram da perdição da nau Santiago, que deu nos baixos da Índia, como mais largamente contarei adiante.

---

<sup>1</sup> 原語 baixos da Índia。フェルナン・ヴァス・ドウラードの地図にも記載があり(後掲)、カレイラ・ダ・インディア有数の航海の難所として怖れられた。現在バサス・ダ・インディア(Bassas da India)と呼ばれ、1897年以來フランス領。モサン

## マクーア族は人を食う

さて、モサンビークに境界を接したもろもろの土地で暮らすマウルーサと、彼のマクーア族の家来のことへ話を戻す。読者は以下のことを知らねばならない。彼らはよそ者であるにもかかわらず、その昔、軍勢をもってこれらの土地の原住民に闘いを挑みこれを圧倒した。その原住民もマクーア族である。前者のマクーアは武力をもって後者のマクーアの土地を奪いそれらを制圧のもとに置いた。彼らがこのことをやってのけるに費やした労苦は実に僅かであった。そのわけは、彼らが習慣としている尋常ならざる残虐性のゆえであり、さらには、いくさで殺したカフル人の人肉を喰う、という蛮行をやってのけるためだ。生け捕りにした者を生きたまま喰うことさえ、ある。それゆえ原住民は、土地の大部分を彼らの前に投げ出してしまい、まったくマウルーサの名が出たのを聞くだけで、<sup>おしげ</sup>怖気づいてしまう。マウルーサ配下のマクーア人は殺したり掠奪したりに血道を上げているのであるから、奪い、殺し、出会うものを喰ってしまふほか、何の関心も懷いていないかのようだ。しかもこうして暴虐的に奪い取った土地を耕すことに精出すマクーアの連中などほとんどいない。彼らは皆——筋骨隆々として苦難に堪えうる見かけであるのに——からっきし怠惰であり、暇つぶしにうつつを抜かしているからだ。こういう性情こそ彼らがやってのけるあらゆる悪行の主たる原因だ。暇つぶしと殺戮行為の日々を連中は、性懲りもなく続けているのだが、やがて主の年の1585年、ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラがモサンビークのカピタンであったとき、彼らの無軌道ぶりはさらに増幅、大胆不敵な態度を示して、幾度となく、モサンビーク大陸側の浜へ来襲を繰り返した。そこにモサンビークのポルトガル人はヤシ畑や菜園を所有する。そうしたものこそ、当地におけるポルトガル人の財産であり、彼らはその財産に手を突っ込んで、掠奪や暴行、さらには殺害を<sup>ほしいまま</sup>恣にした。そのためポルトガル人は財産をほぼ失い、残った財産すら無防備の状態にさらすことを余儀なくされた。マクーアのカフル人がその悪行を多少緩める、とは、ポルトガル人の財産に攻撃を仕掛け、その家に上がり込み、ポルトガル人に向かって布地を出せ、飲食を寄せせと、要求する程度にとどめる、ということだ。カフル人が要求したとおりの分量をポルトガル人が差し出さねば、カフル人はたちまちその分を暴力で奪い取り、多くの場合ポルトガル人の家に火を放ち、彼らのヤシ畑のヤシを切り倒してしまう。ポルトガル人はもはやみずからの財

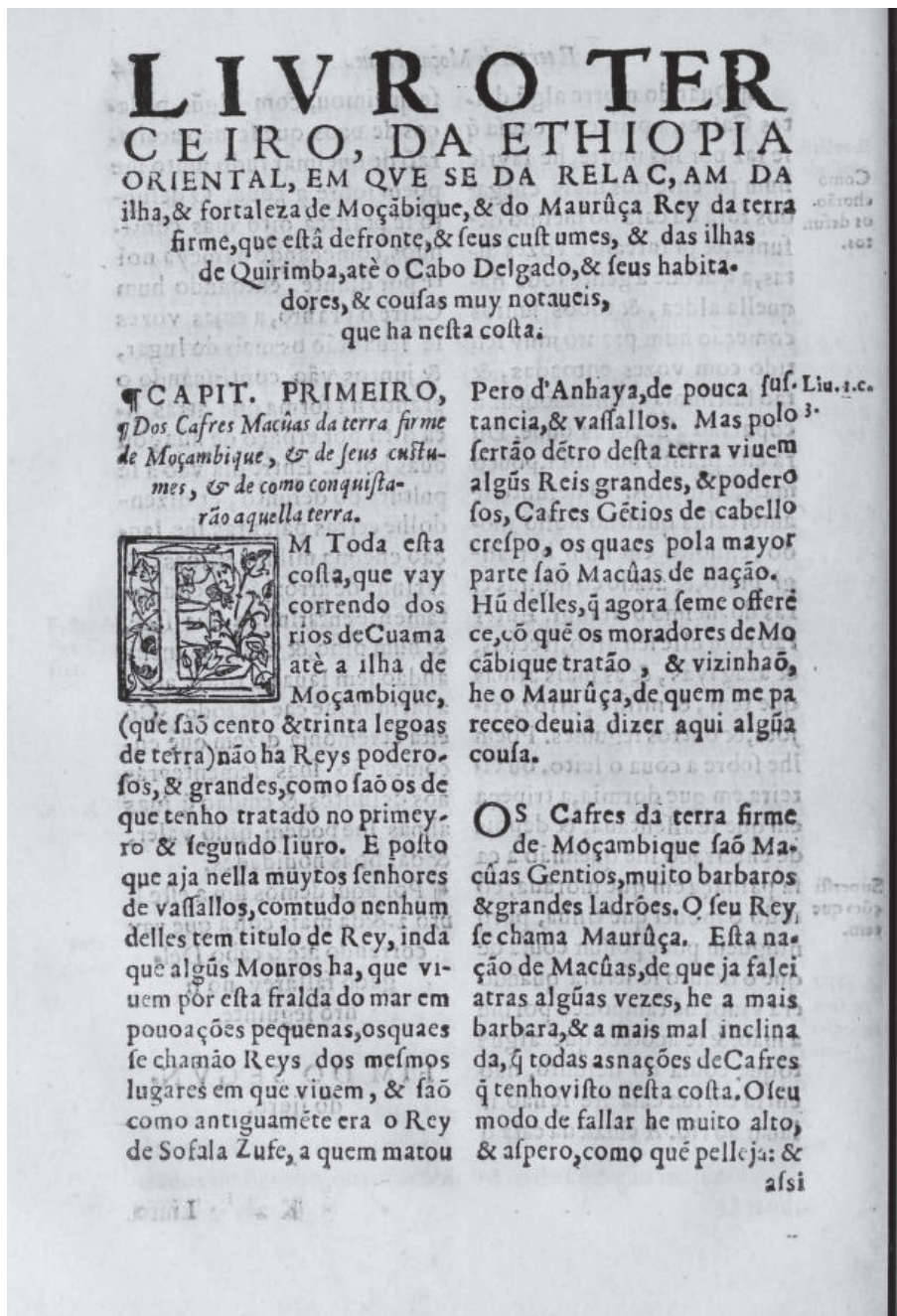
---

ビーク海峡南部にある無人島。ほぼ環礁によって構成され、波の高いときは姿を消す。

産を管理する力を失っていた。ポルトガル人に管理を任されてその財産を維持しようとする連中も、その財産を守ることによって得する以上の損を被りつつあり、カフル人のために殺されたり喰われたりする危険にもさらされていた。

#### Os Macûas comẽ gête.

Tornando pois ao Mauruça, e a seus vassallos macuas, que habitam as terras fronteiras a Moçambique, é de saber que, sendo eles estrangeiros, vieram antigamente com guerra sobre os naturais destas terras, também macuas, e por força d'armas lhas tomaram, e se apossaram delas, o que fizeram com pouco trabalho, por causa da grande crueldade que usavam e comer carne humana dos cafres que matavam na guerra, e inda dos que tomavam vivos. E por isso os naturais lhes largaram a maior parte da terra, e se assombraram de ouvir nomear o Mauruça. Tão encarniçados andavam estes macuas em suas mortes, e latrocínios que se não ocupavam em outra cousa mais que em roubar, matar, e comer quanto achavam, e mui poucos se davam a cultivar as terras que tiranicamente tinham usurpado, porque todos naturalmente (inda que robustos, e sofredores de trabalho) são prigiçosos, e dados ao ócio, causa principal de todos os males que cometeram. Nesta ociosidade, e carniçaria foram continuando alguns anos, até que na era do Senhor de 1585, sendo Nuno Velho Pereira Capitão de Moçambique, se desmandaram mais, e tomaram tanta ousadia que vinham muitas vezes à praia da terra firme, onde os portugueses de Moçambique têm seus palmares, hortas, e searas, que são as fazendas desta terra, e nelas faziam muitos roubos, forças, e mortes, de modo que os portugueses vinham quasi a perder, e desamparar suas fazendas; e quando menos mal lhes faziam, era virem os cafres a elas, e meterem-se-lhes em casa, pedindo-lhes panos, e de comer e de beber, e se lhes não davam quanto queriam, lho tomavam por força, e muitas vezes lhes queimavam as casas, e cortavam as palmeiras. De maneira que os portugueses não podiam ser senhores de suas fazendas, e aqueles que com estes encargos as queriam sustentar recebiam mais perda do que elas valiam, e juntamente se arriscavam a serem mortos, e comidos polos cafres.



Furaças  
queixadas  
das por  
galantaria.

afsi a primeira vez que osvi  
tar fallado, cudei q̄ pellejauão.  
Todos ordinariamente limaõ  
os dentes de cima, & de baixo,  
& tãõ agudos os trazem como  
agulhas. Pintaõse todos polo  
corpo cõ hũ ferro agudo, cor-  
tando suas carnes. Furaõ am-  
bas as queixadas das pontas  
das orelhas, quasi atẽ a boca,  
cõ tres ou quatro buracos de  
cada parte, por cadahum dos  
quaes cabe hũ dedo, & por el-  
les lhe apparecẽ as gingiuas,  
& os dẽtes, & lhe corre ordina-  
riamente a humidade, & cospi-  
nho da boca. E por esse respei-  
to, & tambẽ por galantaria tra-  
zẽ em cadahũ destes buracos  
metida hũa rolha de pao, ou de  
chũbo, q̄ pera isso fazẽ redõda,  
& os q̄ as podẽ trazer de chũ-  
bo saõ mais ricos, & tratãose  
com mais custo, porq̄ o chũbo  
val muito entre elles. Tambẽ  
trazẽ dous buracos nos beiços  
no de cima metem hũ pao del-  
gado, como hũa penna de gali-  
nha, de cõprimẽto de hum de-  
do, & ali o trazem direito pera  
fora, como hum prego, & no  
de bayxo trazẽ hũa grande ro-  
lha de chumbo, encaixada, tãõ  
pesada, que lhe derruba o bei-  
ço quasi atẽ a barba, & afsi lhe  
andaõ sempre apparecẽdo as

gingiuas, & dentes limados, q̄  
parecẽ demonios. Trazẽ mais  
as orelhas todas furadas e ro-  
da cõ muitos buracos, & nel-  
les metidos hũs paos delgados  
como agulhas de rede, de com-  
primento de hum dedo, q̄ pare-  
cem porcos espinhos. Etudo if-  
to trazẽ por galantaria & festa,  
porque quando andãõ ano-  
jados, ou tristes, deixãõ tudo  
ifto, & trazẽ todos os buracos  
destapados. He gẽte muito ro-  
busta, & de muito trabalho.  
Todos andaõ nũs, afsi homẽs,  
como molheres, & quando an-  
daõ bẽ vestidos trazẽ hũa pel-  
le de bugio, ou d'outro animal  
çingida da cintura atẽ os jo-  
elhos. Em todos os mais cultu-  
mes, ratos, modos de viuer,  
sustentaçãõ & lugares em q̄ ha-  
bitãõ, saõ muito semelhantes  
aos Cafres de Loranga, de q̄ já  
faley atras, & deixo de o repi-  
tir aqui por abrecuiar. Estes  
custumes q̄ tenho dito, saõ de  
quasi todos os Cafres desta cos-  
ta, q̄ viuẽ polos matos, & mais  
em particular destes Macûas,  
nos quaes se achãõ mais bru-  
talidades.

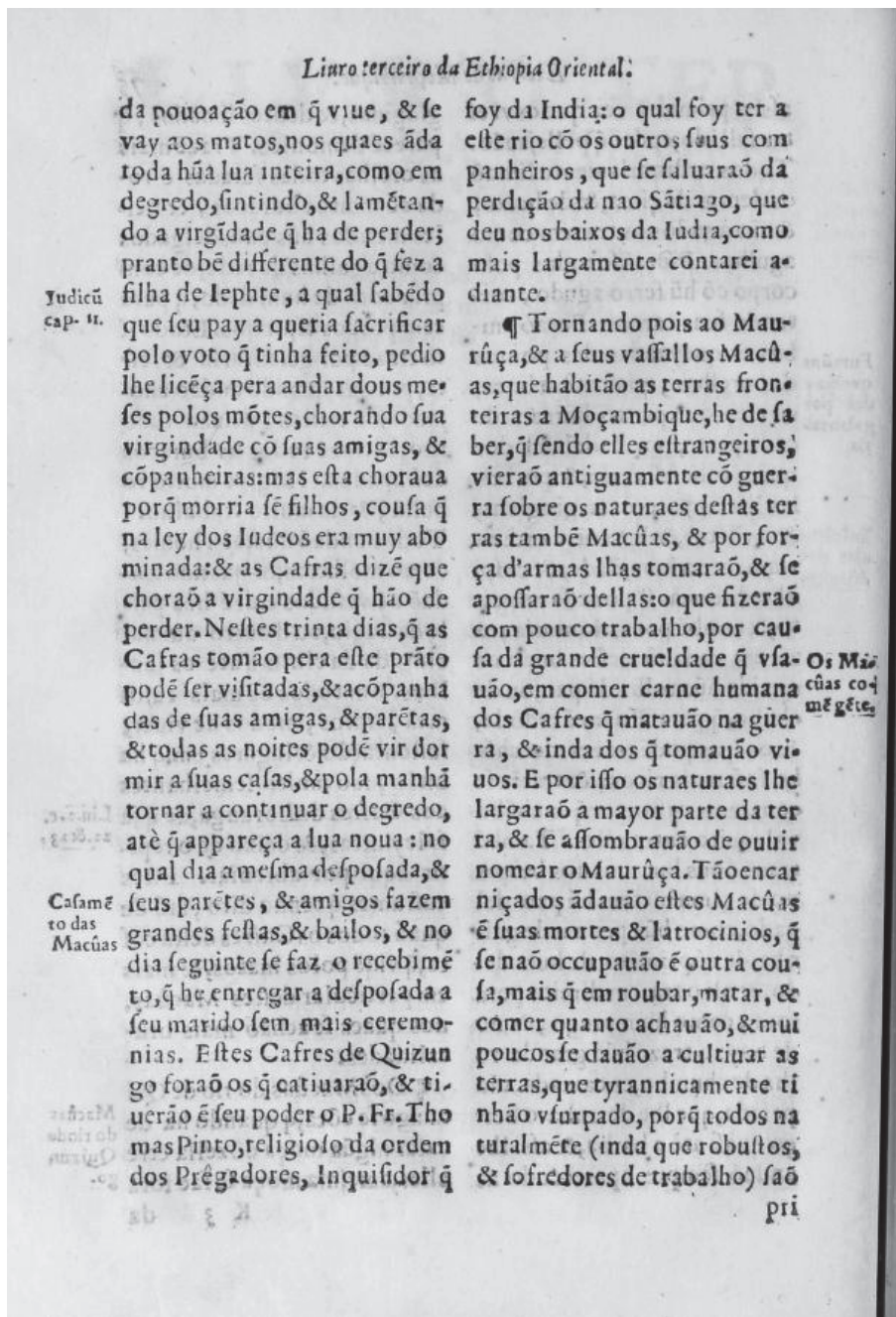
¶ Dos Macûas do rio de Qui-  
zungo se cõta, q̄ quando ha de  
casar algũa moça dõzella entre  
elles, a mesma moça se fae fora

Macûas  
do riode  
Quizun-  
go.

K 3 da

p.75. 左段。Furãõ as queixadas por galantaria。[マクーア族のカフル人はお洒落として、顎の両側に穴をあける]

右段。Liu. 2, c. 22 & 23. [第2巻第22および23章] / Macûas do rio de Quizungo. [キズンゴの河のマクーア族]



p.75v. 左段. Iudicũ, cap.11.〔「土師記」第11章〕/ Casamẽto das Macúas〔マクア族女性の結婚〕

右段. Os Macúas comẽ gẽte.〔マクア族は人を食う〕

priguiçosos, & dados ao ocio, caufa prícipal de todos os males, que cometião. Nesta ociofidade, & carniçaria foraõ continuando algũs annos, atè que na era do Sñor de 1585. sendo Nuno velho Pereira capitão de Moçambique, se desmandá raõ mais, & tomaraõ tanta oufadia, que vinhão muitas vezes à praya da terra firme, onde os Portuguefes de Moçambique tem seus palmares, hortas, & searas, que são as fazendas desta terra, & nellas fazião muitos roubos, forças, & mortes, de modo que os Portuguefes vinhão quasi a perder, & desemparrar suas fazendas; & quando menos mal lhe fazião era virem os Cafres a ellas, & meteremselhe em casa, pedindo-lhe pannos, & de comer, & de beber, & se lhe não dauão quanto querião, lho tomauão por força, & muitas vezes lhe queimauão as casas, & cortauão as palmeiras. De maneira que os Portuguefes não podião ser senhores de suas fazendas, & aquelles que com estes encargos as querião sustentar, recebião mais perda do que ellas valião, & juntamente se ariscauão a serem mortos, & comidos polos Cafres.

Insolencias dos Macúas

CAP. SÈGVNDO,  
Da guerra que os Portuguefes de Moçambique tineraõ com o Maurúça, & do roim seu ceſſo della.



Quando Nuno Velho Pereira, tanto atreuimento & soltura dos Macúas, determinou tomar delles vingança, destruilos, & queimarhe a cidade em q̄ o Maurúça moraua, q̄ estaua tres ou quatro legoas pola terra dentro. Pera o qual effeito mandou quarenta Portuguefes, & tres soldados da fortaleza, & casados de Moçambique, dos que tinhão fazendas na terra firme: os quaes magoados das muitas forças, & perdas q̄ tinhaõ recebido dos Macúas, se offereceraõ de boa vontade pera este assalto, leuando consigo seus escrauos, & outra muita gête forra da terra, que serião perto de 400. homens, & por capitão de toda esta gente mandou Antonio Pinto seu criado, tambem casado na fortaleza. Concluyda esta determinação, & aparelhadas as cousas necessarias pera esta guerra, passáraõ da ilha pera a terra firme hũa tarde ao sol posto com muito segredo, sem dizerem pera onde hião, com

Guerra dos Portugueſes cõtra os Macúas

K 4 propo

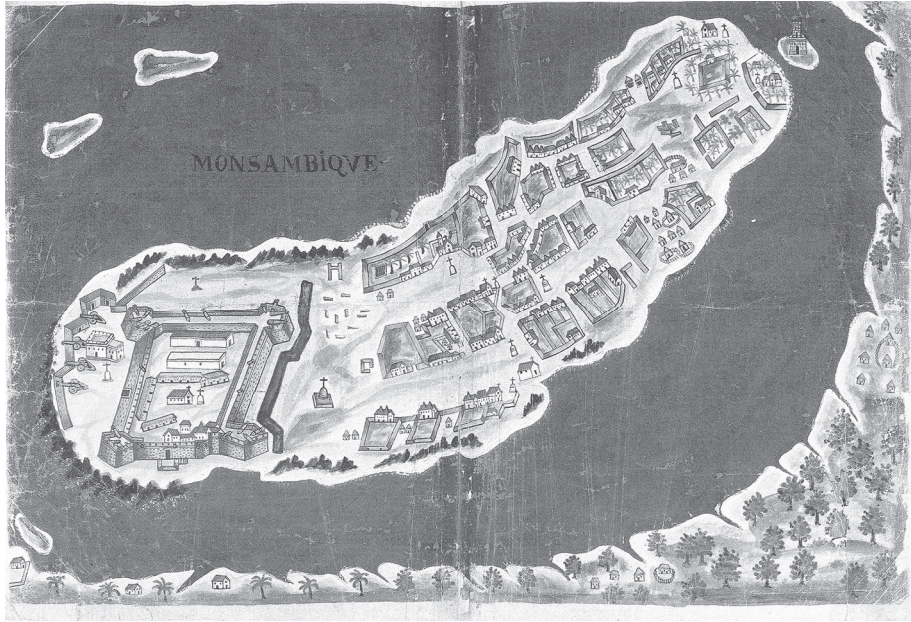
p.76. 左段。Insolencias dos Macuas. [マクーア族の専横の振舞い]

右段。Guerra dos Portugueses cõtra os Macúas. [マクーア族に対するポルトガル人のいくさ]





ポルトガルの地図製作者フェルナン・ヴァス・ドウラードが描く16世紀中葉のアフリカ南東部。特にモサンビーク附近。逆さ文字で書かれたmosambiqueの9つ上にJ[lha] de queriba(キリンバ島)と見える。モサンビーク海峡の南、サン・ロウレンソ島(マダガスカル)の左手に、航海の難所として著名であった b[aixos] da India(インディアの浅瀬)が見える。Fernão Vaz Dourado, *Atlas. Reprodução do códice iluminado 171 da Biblioteca Nacional*, ed. Luís de Albuquerque et al., Lisboa, Finantia /Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1991 より。



ポルトガルの年代記者で地理学者のアントニオ・ボカーロが描く 1630 年頃のモサンビーク(MONSAMBIQUE)。左側が北で、そこに見えるのがサン・セバスティアン要塞。António Bocarro, *O Livro das Plantas de Todas as Fortalezas, Cidades e Povoações do Estado da Índia Oriental*, III. Estampas, ed. Isabel Cid, Lisboa, Imprensa Nacional /Casa da Moeda, [1992] より。

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み



モザンビークにおけるカフル人(Cafres in Mozambique)。地理学者ヨアン・ブラウの大世界地図『アトラス・マイオール』（1665年）所載。アフリカ全図を取り巻く人種・風俗図のひとつとして描かれる。Joan Blaeu, *Atlas Maior 1665*. «El Mejor Atlas y el Más Grande Jamás Publicado», Köln *et al.*, Taschen, s/d. より。

## CAPÍTULO II (Primeira Parte, Terceiro Livro)

### **Da guerra que os portugueses de Moçambique tiveram com o Mauruça, e do ruim sucesso dela.**

第2章(第一部第3巻) モザンビークのポルトガル人がマウルルーサと行なった戦争、およびそのひどい結末について

マクーア族に対するポルトガル人のいさ /マクーア族および彼らの街に対して行なわれた殲滅・破壊

ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラはマクーア人のあまりの大胆不敵さと跳梁<sup>ちようりょう</sup>ぶりに直面し、彼らへ復讐を行ない、彼らを破壊し、マウルルーサが住む町を焼き払おうと決意した。マウルルーサが

住む町は内陸に 3~4 レグア入り込んでいる。この目的を達するためヌーノ・ヴェーリヨは、本土側に資産を有する連中から選抜した 40 人のポルトガル人を派遣した。彼らの中には皆に務める兵士もいれば、モサンビークのカザード\*もいた。彼らはマクア人から蒙る多大な圧迫と損失とに苦しんでいたから、自発的に、襲撃に加わりたいと申し出た。それに際し彼らはみずからの奴隷や、みずからの地所の外にいる縁者もあまた帯同した。その数は 400 人近くであったろう。ヌーノ・ヴェーリヨは、これらすべての人々のカピタンとしてアントニオ・ピントを遣わした。アントニオ・ピントはヌーノ・ヴェーリヨみずからの従僕であり、これまた皆の中で生計を営むカザードであった。こうした決心のもと、このいくさのため必要ないっさいを整えると、彼らはモサンビーク島を発ち本土へ向かった。進発はある午後の日暮れどきに、十分な秘密を保って行なわれた。お互いこれからどこへ行くのかさえ口外しなかった。秘密を保つため意図的に行軍は夜行ない、油断していると見られるマウルーサへの攻撃は、早暁に仕掛けることにした。この決意は実行に移された。やがて払暁、彼らはマウルーサの町へ達した。マウルーサの配下は皆、油断していた。彼らはその多くが、さしたる抵抗もせぬまま殺害された。ゆえに労苦らしい労苦もなくポルトガル人はマウルーサの集落を破壊、これに火を放った。

\*原綴り *casado*。「既婚者」を意味するが、ポルトガル植民史の文脈では、*solteiro*（「独身者」）との対比において史的意義を含む語彙として用いられる。1510 年にゴアを征圧したアフォンソ・デ・アルブケルケ以来、ポルトガルの為政者がインディアを経営するに際しより重要な頼みの綱としたのがこのカザード *casado* であった。母国を遙か遠く離れた交易もしくは支配の拠点において、同地の身分ある婦人とのあいだにカトリック倫理にのっとりた家庭を築き、正統な嫡子を儲けたポルトガル人こそ、放縦かつ淫乱な生活に耽りがちなソルテイロ *solteiro* に比べ、いっそう真剣に“自己の問題”として植民地を守ろうとする努力を払うであろう。そうしたおもんばかりからポルトガル王室は、ポルトガル人植民者と現地女性——インドにあつてはなるべく身分高いヒンドゥー教徒——との婚姻を積極的に奨励するかわら、ポルトガル本国の身分ある両親が遺した孤児——女兒——を植民地へ送り込み、これを植民者に嫁がせることによって、彼らが独身生活の放恣と好色の悪弊に陥ることを可能な限り防止しようとした。

#### Guerra dos Portugueses cõtra os Macûas. /Destruição dos Mucuas (sic) & sua cidade.

Vendo Nuno Velho Pereira tanto atrevimento, e soltura dos macuas, determinou tomar deles vingança, destruí-los, e queimar-lhes a cidade em que o Mauruça morava, que estava três ou quatro léguas pola terra dentro. Pera o qual efeito mandou quarenta portugueses, entre soldados da fortaleza, e casados de Moçambique, dos que tinham fazendas na terra firme; os quais, magoados

das muitas forças, e perdas que tinham recebido dos macuas, se ofereceram de boa vontade pera este assalto, levando consigo seus escravos, e outra muita gente fora da terra, que seriam perto de quatrocentos homens, e por capitão de toda esta gente mandou António Pinto seu criado, também casado na fortaleza. Concluída esta determinação, e aparelhadas as cousas necessárias pera esta guerra, passaram da ilha pera a terra firme ãa tarde ao sol-posto com muito segredo, sem dizerem pera onde iam, com propósito de caminhar de noite, e de madrugada darem sobre o Mauruça, que estava descuidado. Esta determinação se pôs em efeito, porque foram até à cidade do Mauruça, onde chegaram de madrugada, e acharam a gente toda descuidada, e mataram muita parte dela sem fazer resistência algũa, polo que com pouco trabalho destruíram a povoação, e lhe puseram fogo.

#### ポルトガル人に対して行われた殺戮と破壊

この襲撃から逃れることのできたマクーア人は退却し、町の周囲に広がる幾つかの密林のあいだに身を隠した。後日彼らは全員改めて集結、とある密林の中に入った。その密林だが、ポルトガル人がモサンビークへ戻るとき必ず通過せねばならぬ途上に位置している。彼らがそこに身を潜めたのは、できるなら、ポルトガル人に対する復讐を行なう意図があったからであろう。他方ポルトガル人は、焼き討ちを済ませ、カフル人もあるいは死亡し、あるいは逃亡してしまつた以上、その町でやることはもうないと考え、すべては盤石<sup>ばんじやく</sup>であると判断した。ポルトガル人がエスピナルダ銃を奴隷へ渡し、運ぶよう言いつけたのも、そうした〔油断〕のせいだ。ポルトガル人は手持ちの輿<sup>こし</sup>に身を横たえ、これを他の奴隷に担がせ運ばせた。こうして彼らは再びモサンビークへ帰還するが、相互の連係はなく、ばらばらであつて、統制や秩序はまるでなかつた。さながら何の懸念もなく悠々と道を歩む連中のようであつた。しかしカフル人は整然と、そしていっそうの配慮を絶やさず、ポルトガル人を待ち受けていた。ポルトガル人を適度な距離に引き寄せるや、カフル人は突如襲撃を仕掛けた。その勢いは猛烈、火を吐くようであり、ポルトガル人はほぼ全員が殺された。生き残つたポルトガル人は僅かふたりか3人、それにカフル人数名。彼らは密林に入り込み、そこに身を潜めた。モサンビークへ辿り着いたのはその3日後。殺されたばかりか、マウルーサ配下のマクーア人に喰われてしまつたという、仲間の身に生じた悲惨な末路に関する知らせがもたらされた。これに類する惨事

は、ポルトガル人の身の上に数多く生じた。それは、ここ一帯に住むポルトガル人のおのれに対する過剰な自信、加えて彼らのカフル人に対する度しがたい見くびりのなせるわざであった。

#### Morte, & destruição dos Portugueses.

Os macuas que puderam fugir deste assalto se foram embrenhar polos matos que estão ao redor da cidade, e depois se ajuntaram todos, e se meteram em um mato que estava no caminho por onde os portugueses haviam de tornar pera Moçambique, com intento de se vingarem deles, se pudessem. Por outra parte os portugueses, vendo que não havia mais que fazer na cidade, pois ficava queimada, e os cafres dela mortos, e fugidos, cuidaram que tudo ficava seguro, e deram as espingardas a seus escravos pera que as levassem, e eles meteram-se em seus andores, em que outros escravos os levavam às costas; e desta maneira se tornavam a recolher pera Moçambique, espalhados uns aos outros com muita desordem, como quem caminhava por terras seguras. Mas os cafres que os estavam esperando com mais ordem, e melhor cuidado, tanto que os tiveram a bom lanço, deram subitamente sobre eles com tanto ímpeto, e raiva que a todos mataram, sem ficarem mais que dous, ou três portugueses, e alguns cafres, que se embrenharam polos matos, onde estiveram escondidos, e daí a três dias vieram ter a Moçambique, e deram as novas do ruim sucesso de seus companheiros, que ficavam mortos, e comidos polos macuas do Mauruça. Outros muitos desastres semelhantes a este têm acontecido aos portugueses, pola muita confiança que têm de suas pessoas nestas partes, e pouca conta em que têm os cafres.

#### マウルーサ、ポルトガル人と和平を結ぶ

さらにしばらくのあいだマウルーサは、モサンビークのポルトガル人に対し残虐ないくさを続け、上述のように、大陸側にあるポルトガル人の資産を破壊した。マウルーサがこの地方一帯において、叛逆者にして地所の占有者として振舞ったのは当初の数年であった。マウルーサはやがて[モサンビーク]地方一帯に定着、土地を耕すことを始めた。併せてマウルーサはモサンビークのポルトガル人住民と商売を行ない、交易を営むことが必要と判断した。それによってもたらされる利益に惹かれてのことだ。その後マウルーサとポルトガル人とのあいだに、平和な関係が結ばれた。それを確認するため、マウルーサは次のように命じた。いかなるマクーア人もポルトガル人の資産を暴力で侵してはならぬ、強奪も働いてはならぬ、人肉

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタール』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

を喰うこともまかりならぬ、そうではなくて、皆土地を耕し、モサンビークの人々〔ポルトガル人〕と商売を行ない、友好的かつ誠実に双方の商品を買ったり売ったりするよう心がけよ、と。マウルーサの命令はしかし、多年にわたりきちんと履行されることがなかった。このカフル人〔マウルーサ族〕が無秩序の行動をとるなど、ごくありきたりのことだからだ。連中が己<sup>おのれ</sup>にとっては普通の、しかし残酷な習俗から離れることはないし、彼らがマウルーサの掟<sup>おきて</sup>を守るとしても、それは心から自発的のことというよりは、マウルーサから押しつけられかつマウルーサを怖れてのことにすぎない。上述の如きマウルーサの命令など、彼らの悪しき性癖からすれば、どだい受け容れがたいものなのだ。人肉を喰うという一点について言うなら、彼らはもう大っぴらにはやらぬものの、可能である限りいつでも、隠れて秘密裡にこれを喰う。そのありさまは次章で語るもろもろの事件で明らかなおりだ。

#### Pazes do Mauriça cõ os Portugueses.

Alguns tempos continuou o Mauriça cruel guerra com os portugueses de Moçambique, destruindo-lhes suas fazendas da terra firme, como fica dito, que foram os primeiros anos que ele andou nestas terras como levantado, e forasteiro; mas depois que fez assento nelas, e começou de as cultivar, vendo que lhe era necessário ter comércio, e trato com os portugueses moradores de Moçambique, polo proveito que disso lhe vinha, fez pazes com eles; e pera confirmação delas, mandou que nenhum macua fizesse mais força, nem roubos nas fazendas dos portugueses, nem comesse carne humana, senão que todos cultivassem as terras, e tivessem comércio com a gente de Moçambique, comprando-lhe, e vendendo-lhe suas mercadorias amigável, e fielmente. O que se cumpriu mal muitos anos, porque sempre estes cafres se desmandaram, usando de seus ordinários, e cruéis costumes, e mais por força, e medo do Mauriça que por vontade, guardavam suas leis, contrárias à sua má inclinação. E quanto ao comerem carne humana, já o não fazem publicamente, mas em secreto todas as vezes que podem a comem, como se verá nos casos do capítulo seguinte.

Liuro terceiro da Ethiopia Oriental:

Destruição dos Mucuas & sua cidade.

propósito de caminhar de noite, & de madrugada darem sobre o Maurúça, que estava descuidado. Esta determinação se pos em effeito, porque foraõ até a cidade do Maurúça, onde chegaram de madrugada, & acharão a gente toda descuidada, & matarão muita parte della, sem auer resistência alguma; polo que com pouco trabalho destruíraõ a pouoação, & lhe puserão fogo.

¶ Os Macúas que puderão fugir deste assalto, se foraõ embrenhar polos matos, que estãõ ao redor da cidade, & depois se ajuntaraõ todos, & se meteraõ em hum mato, que estava no caminho, por onde os Portugueses auiaõ de tornar pera Moçambique, com intento de se vingarem delles, se pudessem. Por outra parte os Portugueses, vendo que não auia mais que fazer na cidade, pois ficaua queimada, & os Cafres della mortos, & fugidos, cuidaraõ que tudo ficaua seguro, & deraõ as espingardas a seus escrauos pera que as leuaõse, & elles meteraõse em seus andores, em que outros escrauos os leuaõ ás costas: & desta maneira se tornauão a recolher pera Moçambique, espalha

dos hús dos outros, com muita desordem, como que caminhaõ por terras seguras. Mas os Cafres que os estauão esperando com mais ordem, & melhor cuidado, tanto que os tiueraõ a bom lanço, deraõ subitamente sobre elles com tanto impeto, & raiua, que a todos mataraõ, sem ficarem mais que dous, ou tres Portugueses, & alguns Cafres, q se embrenharaõ polos matos, onde estiueraõ escondidos, & dahi a tres dias vieraõ ter a Moçambique, & deraõ as novas do roim successo de seus cõpanheiros, que ficauão mortos, & comidos polos Macúas do Maurúça. Outros muitos de Cafres semelhantes a este tem acontecido aos Portugueses, pola muita confiança, que tem de suas pessoas nestas partes, & pouca conta em que tem os Cafres.

¶ Algũs tempos continuou o Maurúça cruel guerra cõ os Portugueses de Moçambique, destruindohe suas fazendas da terra firme, como fica dito, que foraõ os primeiros annos que elle andou nestas terras, como leuanteado, & forasteiro: mas depois que fez assento nel las, & começou de as cultivar, vendo que lhe era necessario

Morte & destruição dos Portugueses.

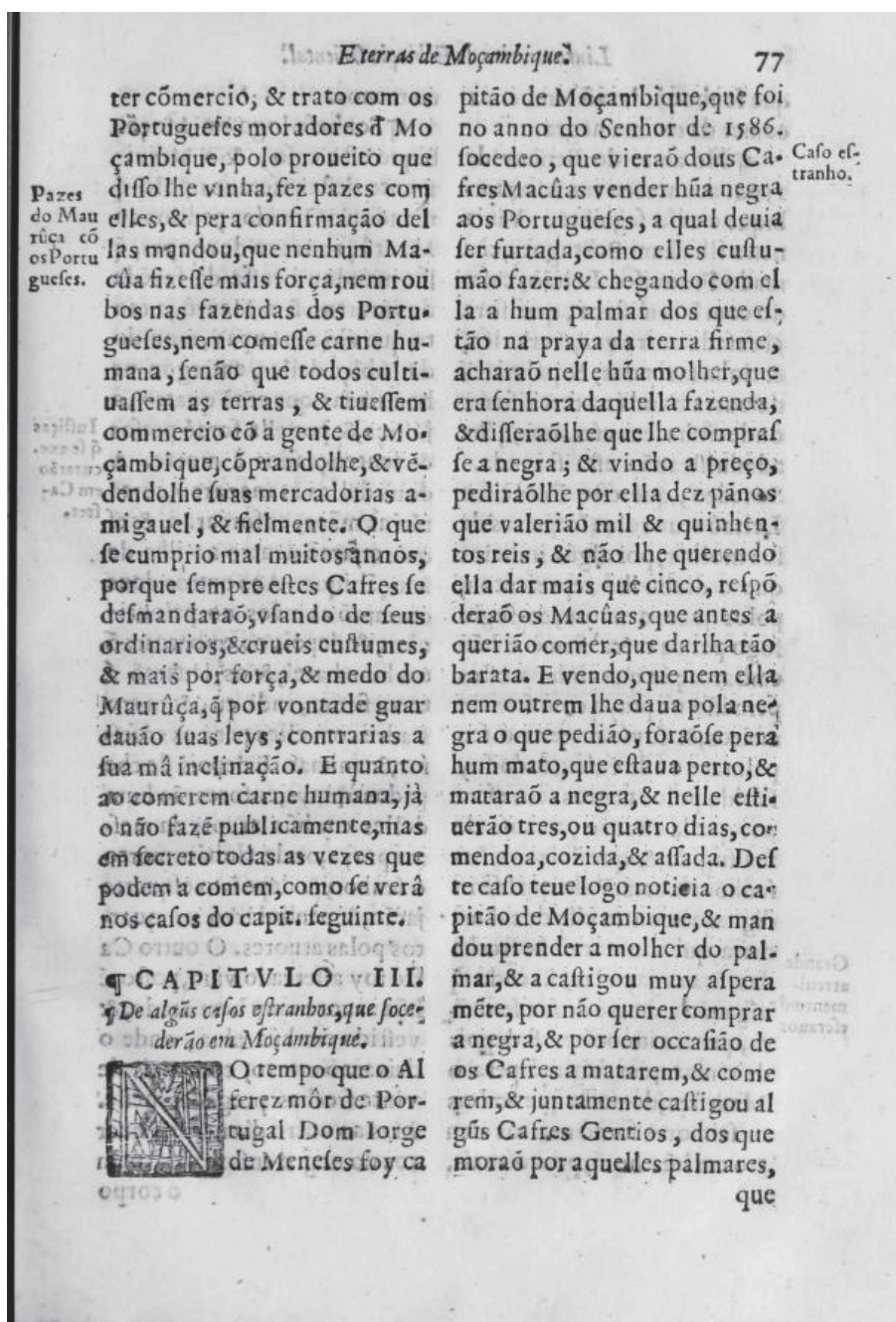
ambrosio  
100  
100

ter

p.76v. 左段。Destruição dos Mucuas (sic) & sua cidade。[マクーア族および彼らの街に対して行なわれた殲滅・破壊]

右段。Morte, & destruição dos Portugueses。[ポルトガル人に対して行われた殺戮と破壊]





p.77. 左段。Pazes do Mauriça com os Portugueses. [マウルーサ, ボルトガル人と和平を結ぶ]

右段。Caso estranho. [奇妙な事件]

## CAPÍTULO III (Primeira Parte, Terceiro Livro)

### De alguns casos estranhos que sucederam em Moçambique.

#### 第 3 章(第一部第 3 卷) モサンビークにおいて生じた幾つかのただならぬ出来事について

##### 奇妙な事件

ポルトガルの<sup>アルフェレス=モール</sup>小警吏長<sup>2</sup>であったドン・ジョルジェ・デ・メネーゼスがモサンビークのカピタンの任にあったとき、それは主の年 1586 年であったが、次のような事件が起こった。すなわち、マクーア族のカフル人ふたりがある黒人女をポルトガル人へ売りつけようとやってきた。彼女は、マクーア族が常々やっているように、かどわかされてきたに違いなかった。彼らがこの女を連れて大陸側の浜に幾つかあるヤシ林の一面にやってくると、そこにひとりの婦人がいた。これはかの農園の女主人である。彼らは女主人に言った。俺たちからこの黒人女を買ってもらえないだろうか、と。売り値の話になると、男たちは婦人に、黒人女の対価として、布地 10 枚を請求した。その価値はおよそ 1500 レイスであったろう。ところが婦人は男たちに対し、布地 5 枚を超える対価は出たくないと言ったため、ふたりのマクーア族は、そんな安値で引き渡すくらいなら、いっその女を喰ってしまう、と応じた。男たちは、黒人女の対価として要求したものを女主人が出すつもりなし、と見切りをつけた。彼らは近くの密林へ去り、黒人女を殺害してしまった。男どもは密林に 3~4 日こもり、そうして黒人女を煮たり焼いたりして喰ったのだ。さっそくこの事件の消息を、モサンビークのカピタン[ドン・ジョルジェ・デ・メネーゼス]が掴んだ。カピタンはヤシ畑の女主人を捕まえるよう命じ、これに厳しい罰を与えた。理由として、黒人女を男どもの言い値で買い取ってやらなかったことを挙げた。それこそ、女が殺され喰われるきっかけになったと。併せてカピタンは、かのヤシ畑一帯に暮らす異教徒のカフル人から数名を抜き出し処罰した。彼らもまた黒人女が喰われてしまったことへ手を貸していた、というカピタンの認識であった。

##### Caso estranho.

---

<sup>2</sup> 原語 Alferes mór. アラビア語の *al-fâris* に由来。cavaleiro (騎士) や escudeiro (盾持ち) を意味する語彙。ポルトガル語ではとりわけ下級職位の役人を表わすようであるから (*Dicionário Priberam da Língua Portuguesa*。以下 DPLP)、仮

No tempo que o Alferes-mor de Portugal, D. Jorge de Menezes, foi Capitão de Moçambique, que foi no ano do Senhor de 1586, sucedeu que vieram dous cafres macuas vender ãa negra aos portugueses, a qual devia ser furtada, como eles costumam fazer, e chegando com ela a um palmar dos que estão na praia da terra firme, acharam nele ãa mulher, que era senhora daquela fazenda, e disseram-lhe que lhes comprasse a negra; e vindo a preço, pediram-lhe por ela dez panos, que valeriam mil e quinhentos réis, e não lhes querendo ela dar mais que cinco, responderam os macuas que antes a queriam comer que dar-lha tão barata. E vendo que nem ela nem outrém lhes dava pola negra o que pediam, foram-se pera um mato que estava perto, e mataram a negra, e nele estiveram três, ou quatro dias, comendo-a, cozida, e assada. Deste caso teve logo notícia o Capitão de Moçambique, e mandou prender a mulher do palmar, e a castigou mui asperamente por não querer comprar a negra, e por ser ocasião de os cafres a matarem, e comerem, e juntamente castigou alguns cafres gentios, dos que moram por aqueles palmares, que soube ajudarem também a comer da mesma negra.

### 奴隷ら、大胆不敵な振舞いに出る

主の年 1596 年モサンビークにおいて次のような事件が起こった。島〔モサンビーク島〕にひとりのポルトガル人が住んでいた。名をフランシスコ・レイタンといい、あるミスティーサ〔原綴り *mistiça*。混血女。ポルトガル人と原住民女性とのあいだに生まれた婦人であろう〕と結婚生活を送っている。彼女はかつて一度の結婚歴があり、金持ちで、島の対岸の大陸側に、農園やヤシ畑を幾つか所有している。そこにみずからの奴隷（複数）を有し、彼らが彼女のため農園の管理を行なっている。事の顛末は次のようであった。フランシスコ・レイタンは、細君に性悪な疑いをかけた。〔妻がよからぬことを働いているという〕わずかな証跡を悪魔がレイタンへ示したのだ。それを抛りどころに、男は女房を殺めた。レイタンは舟に乗り込み、ただちに大陸側へ逃げた。その舟は、このような事態に備え、漕ぎ手と子どもあらかじめ浜に手配してあったのだ。彼は〔細君の〕ヤシ畑に潜り込んだ。辿り着くや、居合わせた黒人ら——殺した細君の奴隷である——のあいだに、みずからの主人が殺され、下手人——彼女の夫——が逃げてきたという、事件

---

にこの訳語を宛てる。

の顛末が知れ渡っていた。奴隷らはレイタン<sup>レイタン</sup>の行為を憤<sup>いきどお</sup>り、激しく矢を浴びせかけ、アザガイア槍を打ち込んで殺害した。彼らは言った。これで、罪もなく殺されたわが主人<sup>あだ</sup>の仇を討った、と。レイタン殺害後、奴隷らはマウルーサのもとへ逃亡する。一時間足らずのうちに、奴隷たちの主人のみならず、その夫までが命を落としたわけだ。

#### Grande atreuimento de esclavos.

No ano do Senhor de 1596 aconteceu em Moçambique o caso seguinte. Vivia nesta ilha um português, chamado Francisco Leitão, casado com ãa mistiça que fora já casada outra vez, e era rica, e tinha fazendas, e palmares da outra banda na terra firme, onde tinha seus escravos, que lhe administravam esta fazenda. Sucedeu que este Francisco Leitão teve ruims suspeitas de sua mulher, por alguns indícios que o Diabo lhe representou, polos quais a matou, e fugiu logo pera a terra firme em ãa embarcação que tinha prestes pera isso na praia com seus remeiros, e foi-se meter no seu palmar, onde em chegando foi sabida, polos negros seus escravos que lá estavam, a causa de sua fugida, e que deixava sua senhora morta. Polo qual se indignaram contra ele de tal maneira que o mataram às frechadas, e azagaiadas, dizendo que vingavam a morte de sua senhora, que era inocente. E depois de o matarem fugiram pera a Mauruça, de modo que ambos os senhores foram mortos dentro em ãa hora, pouco mais ou menos.

#### カフル人らに下された裁きのかずかず

この事件と、奴隷たちの大胆不敵な振舞いは、ただちにモサンビークに知れた。<sup>オウヴイドール</sup>聴訴官はマウルーサに対し、彼らの身柄を引き渡すよう求めた。引き渡しに応ずれば、対価として布地を数枚——その代金は殺された連中の財布から支払われた——やろうと、マウルーサへ持ちかけた。マウルーサは布地を見るや、どうしても手に入れたいと欲望に駆られ、殺人に手を染めた者——4人であった——を裁きの場へ引き渡した。裁きによって彼らは捕縛され、死を宣告された。4人中ふたりは、これをさんざん拷問でいたぶり、両手を切断し、絞首し、モサンビークの島内で四ッ裂きの刑に処した。他のふたりに対しては、ペロウリーニヨ〔罪人公示台〕にくくりつけ、両手を切断し、しかる後、一艘の舟に乗せ、大陸側へ運んだ。私と、もうひとり別のパードレが彼らに付き添った。彼らの告解を聴いてやりこれを激励するためだ。浜に着後、主人〔フランシスコ・レイタン〕を亡き者にしたその浜で、彼らのひとりが木に吊るされ、絞首さ

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタール』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

れた。その後、骸は四ッ裂きにされ、ばらばらにされた四肢は、木々に掛けられた。もうひとりのカフル人は木に縛られ、白装束を着せられ、生きたまま矢を射込まれた。20本以上の矢に体を縫われるようにして彼らは殺された。ところが翌日、絞首された黒人の四肢も、矢を射込まれて殺された男の死骸も、姿が消えていた。後日判明したのだが、その夜、大陸側に居を構えるカフル人らがやってきて、彼らの遺骸を持ち去り、喰ってしまったのだ。実際、マウルーサの支配下にあるマクーア族のカフル人は、人を喰う。こっそりとそうすることができれば必ずそれをやる。人肉はとても柔らかく、他のいかなる肉よりも旨い、と彼らは言う。

#### **Lustiças que se executarão em Cafres.**

Soube-se logo em Moçambique este caso, e o atrevimento destes escravos, polo que mandou o ouvidor pedi-los ao Mauruça a troco de roupas que lhe mandou à custa da fazenda dos mortos. E o Mauruça tanto que viu as roupas, movido da cobiça delas, entregou os homicidas, que eram quatro, à justiça, e por ela foram presos, e sentenciados à morte. A dous deles atanazaram, cortaram as mãos, enforcaram, e esquartejaram dentro na ilha de Moçambique. Aos outros dous cortaram as mãos no pelourinho, e depois os embarcaram em um batel, e os levaram à terra firme, indo eu, e outro padre com eles pera os confessar, e animar. E depois de chegados à praia, enforcaram um deles em ãa árvore da mesma praia onde tinham morto o senhor, e depois o esquartejaram, e penduraram os quartos polas árvores. O outro cafre foi asseteado vivo, posto em ãa árvore mui bem atado, e vestido em ãa alva, onde o deixaram morto com mais de vinte frechas pregadas nele. Mas ao outro dia nem os quartos do negro enforcado, nem o corpo do asseteado foram vistos, porque aquela mesma noite vieram os cafres da terra firme, e os levaram, e comeram, como depois se soube. De modo que estes cafres macuas do Mauruça comem gente todas as vezes que o podem fazer secretamente, e dizem que a carne humana é mais tenra, e melhor que todas as carnes.

que soube ajudaraõ tambem a comer da mesma negra.

¶ No anno do Senhor de 1596. aconteceu em Moçambique o caso seguinte. Viuia nesta ilha hum Portugues, chamado Francisco Leitão, casado com hũa mistiça, que fora já casada outra vez, & era rica, & tinha fazendas, & palmareda outra banda na terra firme onde tinha seus escravos, q̄ lhe administrauão esta fazenda. Socedeo, que este Francisco Leitão teue roins sospeitas de sua molher, por algũs indicios que o diabo lhe representou, polos quaes a matou, & fugio logo pera a terra firme e hũa embarcação que tinha prestes pera isso na praya com seus remeiros, & foyse meter no seu palmar: onde e chegando foy sabida polos negros seus escravos que la estauão, a causa de sua fugida, & que deixaua sua senhora morta. Polo qual se indignaraõ contra elle de tal maneira, que o mataraõ às frechadas, & azagayadas, dizendo q̄ vīgauão a morte de sua senhora, que era innocete. E depois de o matarem fugiraõ pera o Mauriça, de modo que ambos os senhores foraõ mortos dentro em hũa hora, pouco mais,

Grãde  
atreuimento  
d  
escrauos

ou menos.

¶ Soubese logo em Moçambique este caso, & o atreuimento destes escravos: polo q̄ mandou o Ouuidor pedilos ao Mauriça a troco de roupas, q̄ lhe mandou á custa da fazenda dos mortos. E o Mauriça tanto que vio as roupas, mouido da cobiça dellas, entregou os homicidas, que eraõ quatro, á justiça, & por ella foraõ presos, & sentençaõs á morte. A dous delles atanazaraõ, cortaraõ as mãos, enforcaraõ, & espartejarãõ dentro na ilha de Moçambique. Aos outros dous cortaraõ as mãos no pelourinho, & depois os embarcaraõ em hum batel, & os leuãraõ á terra firme, indo eu, & outro Padre com elles pera os cõfessar, & animar. E depois de chegados à praya, enforcaraõ hum delles em hũa aruore da mesma praya, onde tinhão morto o senhor, & depois o espartejarãõ, & penduraraõ os quatro polas aruores. O outro Cafre foy affeteado viuo, posto e hũa aruore muy bem atado, & vestido em hũa alua, onde o deixaraõ morto, com mais de vinte frechas pregadas nelle. Mas ao outro dia nem os quatro do negro enforcado, nem o corpo

Iusticias  
q̄ se execu-  
cãraõ  
em Cafres.

p.77v. 左段。Grande atreuimento de escravos。〔奴隸ら、大胆不敵な振舞いに出る〕

右段。Iusticias que se executarão em Cafres。〔カフル人らに下された裁きのかずかず〕

o corpo do asfeteado, foraõ viltos, porque aquella mesma noite vieraõ os Cafres da terra firme, & os leuaraõ, & comeraõ, como depois se soube. De modo que estes Cafres Macúas do Maurúça comem gente todas as vezes que o podê fazer secretamente, & dizem que a carne humana he mais tenra, & melhor que todas as carnes.

¶ **CAPITULO IIIII.**

¶ *Da Ilha, & fortaleza de Moçambique, & suas pouoações, & frutos.*



Ilha, & fortaleza de Moçambique está nesta costa, e 15. graos da bāda do Sul. He de mais de mea legoa de comprimento, & no mais largo terá hū quarto de legoa, pouco mais, ou menos. Na póta desta ilha, à entrada da barra está a fortaleza, na qual sempre reside o capitão, com soldados Portugueses de guarnição, que toda a noite & dia vigiãõ aos quarteiros: de dia postos à porta da fortaleza com suas armas, & denoite por cima dos pannos do muro, & dos balluartes: dos quaes tem quatro fortíssimos,

dous pera a banda do mar, & dous pera a ilha, donde também se descobre o mar de hūa parte, & da outra, & nelles estão muitas peças d'artelharía grossa, & fermosa, em que entrão esperas, camellos, & colubrinhas. Dentro da fortaleza está hūa cisterna, que leua duas mil pipas de agoa, que se toma da que choue nos telhados, & muros, por canos que a ella vão ter. Aqui dentro estão os almazés, así da poluora, & coufas necessarias pera defenſão da fortaleza, como de mantimentos de arroz, & milho, de que sempre está bem prouida. No meyo do terreiro desta fortaleza está hūa igreja noua, inda por acabar, que ha de seruir de Sè, & junto della outra da Misericordia.

¶ Esta fortaleza he hūa das mais fortes q̄ ha na India: foy traçada así ella, como a de Dâmão, por hum Architecto, que foy sobrinho do Archebispo santo de Braga Dom Frey Bertholameu dos Martyres da ordem dos Prégadores: o qual Architecto sendo mancebo se foy a Flādres, donde tornou grande official de Architectura, & depois disso foy mandado à India pola Raynha dona  
Ca.

CAPÍTULO IV (Primeira Parte, Terceiro Livro)

**Da ilha, e fortaleza de Moçambique, e suas povoações, e frutos.**

第4章(第一部第3巻) モサンビークの島と要塞, その集落と[そこに生育する]  
果樹について

モサンビークの島および要塞<sup>フォルタレーザ</sup>は、当[エティオピア・オリエンタール]海岸の南側(南緯15度に位置する<sup>3</sup>。[島の]長さは[南北]半レグアを超える程度、最も幅広いところでも[東西]およそ4分の1レグアであろう。この島の端——内港への入り口である——には要塞があり、その中にカピタンが常駐する。これに従うのが戦闘態勢を整えたポルトガル兵士であり、彼らは終夜終日、交替で歩哨<sup>ほしやう</sup>に立つ。昼は、みずから武器を携え要塞の門口で、夜は、城壁や稜堡<sup>バルアルテ</sup>のすみずみで。稜堡<sup>バルアルテ</sup>はたいそう堅牢なのが4つあり、ふたつは海に、残りふたつは島に、それぞれ睨<sup>にら</sup>みをきかせる。稜堡<sup>バルアルテ</sup>からはどちらを向いても海が必ず視界に入る。稜堡<sup>バルアルテ</sup>にはがっちりとし、それでいて美しい火器が多数備えてある。エスペーラ砲[原語 *esperas*。小型の銃砲]やカメーロ砲[原語 *camellos*。短い砲身の銃砲]やコルブリーナ砲[原語 *colubrinas*。長い砲身の銃砲]がそれに含まれる。要塞の内部には貯水槽<sup>システルナ</sup>があり、これに2000ピパの水<sup>4</sup>を貯めることができる。水は、屋根や城壁から落ちてくる雨水が管を伝って貯水槽へ導かれる。要塞の内部にはまた各種の貯蔵庫があり、それは火薬の貯蔵庫であったりそのほか要塞の防禦に必要な物資の貯蔵庫であったり、コメやモロコシといった食糧の貯蔵庫であったりする。要塞はそうしたものの供給に抜かりはない。要塞の広場の中央には新しい教会がひとつある。この教会は完成の途上にあり、やがて大聖堂として運用されるであろう。その傍らにはミセリコルディア附属の別の教会がある。

<sup>3</sup> 1991年モサンビーク島は、ユネスコの世界遺産に指定され、大陸側とは幅の狭い道路で結ばれている。

<sup>4</sup> 原語 *duas mil pipas de agoa*。ピパは液体の古い計量単位で25アルムーデ(*almude*)に相当し(*DPLP*)、アルムーデは、液体に用いる容量単位で12カナード(*canada*)にあたる(*DPLP*)。カナードはほぼ2リットルであるから(*DPLP*)、2000ピパは約10万リットルとなる。



ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み



ノッサ・セニョーラ・ド・バルアルテ(堡壘の聖母)礼拝堂。インディア航海の途上モサンビークに寄港したペドロ・デ・カストロが1522年、船隊の乗組員に築かせたもの。南半球最古のヨーロッパ建築とされる。 ©David Stanley

A ilha, e fortaleza de Moçambique estão nesta costa em quinze graus da banda do sul. É de mais de meia légua de comprido, e no mais largo terá um quarto de légua, pouco mais ou menos. Na ponta desta ilha, à entrada da barra está a fortaleza, na qual sempre reside o capitão, com soldados portugueses de guarnição que toda a noite, e dia vigiam aos quartos: de dia postos à porta da fortaleza com suas armas, e de noite por cima dos panos do muro, e dos baluartes, dos quais tem quatro fortíssimos, dous pera a banda do mar, e dous pera a ilha, donde também se descobre o mar de ãa parte, e da outra, e neles estão muitas peças d'artelharía grossa, e ferosa, em que entram esperas, camelos, e colubrinas. Dentro da fortaleza está ãa cisterna que leva duas mil pipas de água, que se toma da que chove nos telhados, e muros, por canos que a ela vão ter. Aqui dentro estão os almazéns, assi da pólvora, e cousas necessárias pera defensão da fortaleza, como de mantimentos de arroz, e milho, de que sempre está bem provida. No meio do terreiro desta fortaleza está ãa igreja nova, inda por acabar, que há-de servir de sé, e junto dela outra da Misericórdia.

1558年に建設されたモサンビークの要塞

フォルタレーザ

この要塞[サン・セバスティアン要塞]は、インディアに存在するもろもろの要塞の中で最も堅牢なもののひとつである。この要塞の設計はダマンの要塞と同様、ひとりの建築家によって行なわれた。この建築家は大司教サント・デ・ブラーガの甥<sup>おい</sup>にして、説教者の修道会[ドミニコ会]に属するドン・フレイ・ベルトラメウ[バルトロメウ]・ドス・マルティレスである。この建築家は若い頃、フランドレス[フランドル]へ赴き、そこで建築の偉大な棟梁となり、その後、摂政<sup>ライーニャ</sup>ドナ・カテリーナ<sup>5</sup>が本国を統治していたとき彼女によってインディアへ派遣された。与えられた任務は要塞の建設であった。その任命が行なわれたのは主の年1558年。ときにインディア副王の任にあったのはドン・コンスタンティーノ[・デ・ブラガンサ]であった。この建築家はインディアから戻ると、カステーラ[カスティージャ]へ赴き、そこでサン・ジェロニモ会<sup>6</sup>の法衣を纏う。そして国王フィリーペ[フェリーペ]2世の愛顧を受けた。彼の設計によりエスクリアル[エスコリアル]修道院の多くの工事が行なわれた。

**Fortaleza de Moçãbique, fundada no anno de 1558.**

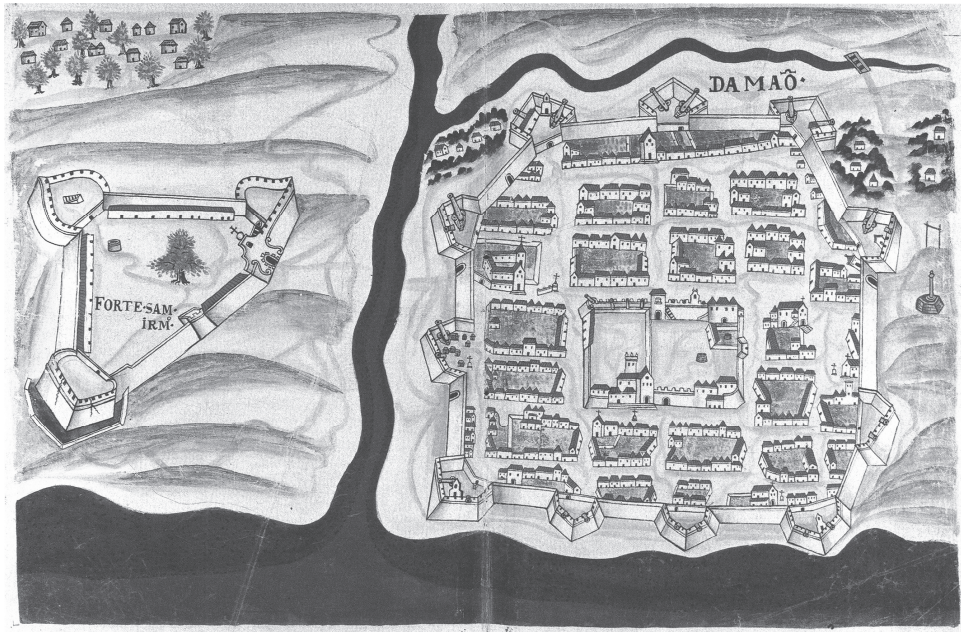
Esta fortaleza é ãa das mais fortes que há na Índia. Foi traçada, assi ela, como a de Damão, por um architecto que foi sobrinho do Arcebispo Santo de Braga, D. Frei Bartolomeu dos Mártires da Ordem dos Pregadores; o qual architecto, sendo mancebo, se foi a Flandres, donde tornou grande oficial de arquitectura, e depois disso foi mandado à Índia pola Rainha Dona Caterina, quando governava este reino, pera fazer estas fortalezas, o que foi no ano do Senhor de 1558, quando D. Constantino foi por Vice-Rei da India. E tornando este architecto da Índia, foi-se pera Castela, onde tomou o hábito da Ordem de S. Jerónimo, e foi mui aceito a el-Rei Filipe II. E por sua traca se fizeram muitas obras no Escorial.

---

<sup>5</sup> 1557年ジョアン3世が没したのち、ポルトガル王に即位したセバスティアンはわずか3歳。そのため、祖母カテリーナが摂政としてセバスティアンを後見した。

<sup>6</sup> 原語 *Ordem de S. Hieronymo*。ラテン語 *Ordo Sancti Hieronymi*。1373年グレゴリオ11世によって認可されたカトリック修道会。

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み



アントニオ・ボカーロが描く 1630 年頃のダマン(DAMÃO)。インド亜大陸の西北の隅、アラビア海に面するダマンは、1559 年ポルトガルに割譲され、当初は、アラビア海におけるポルトガルの制海権を支える役割を果たした。1961 年インド軍によって武力接収された。António Bocarro, *O Livro das Plantas de Todas as Fortalezas, Cidades e Povoações do Estado da Índia Oriental*, III. Estampas より。



サン・セバスティアン要塞(Fortaleza de São Sebastião)。ペーテル・ケリウス『モサンビークの島と要塞』で島の下端(実際は北端)に描かれる要塞。1604 年、1607 年、1608 年と、オランダは執拗にモサンビーク島を攻撃、これを奪取しインド洋の制海権を確立しようともくろむが、ポルトガルはこの要塞に拠ってオランダ勢力を撃退する。©Stig Nygaard

## ノッサ・セニョーラ・ド・バルアルテの礼拝堂 / サン・ドミンゴス修道院

モサンビークの要塞の外側、モサンビーク島の端に、ノッサ・セニョーラ・ド・バルアルテ〔原綴り Nossa Senhora do Baluarte. 堡壘・稜堡の聖母〕を記念する礼拝堂がひとつある。この呼び名が冠されたのは、この教会堂がその昔バルアルテ〔堡壘・稜堡〕であったことに因む。この礼拝堂が要塞へ姿を変える前、そこには内港を守るための火砲が存在した。この礼拝堂には巡礼が盛んにやってくる。巡礼は土地の住民であったり、当海岸を船でゆき交う水夫たち——ポルトガルからの者もインディアからの者も——であったりする。この要塞の正面、島の内側に、美しくも平坦な広っぱがある。広っぱは、モスケータ銃を大きく一発撃ち放した射程以上の長さがあるであろう。幅も同じくらいだ。広っぱが尽きるあたりにサン・ドミンゴスの、新しくたいそう美しい修道院が建っている<sup>7</sup>。岸沿いのサン・ガブリエールの御堂<sup>8</sup>を別とすると、広っぱにこれといった建物は無い。この浜の正面に、ポルトガルからであれインディアからであれ港へやってくるナウ船が錨をおろす<sup>9</sup>。サン・ドミンゴスの修道院の向こうには、ポルトガル人や、島のその他のキリスト教徒らの暮らす集落がゆったりと広がっている。彼らは総数おおよそ 2000 人に達するであろう。この集落には旧要塞やミゼリコルディアの家があり、今なお運用されている。この旧要塞の壁の一角に二層構造の美しい塔がひとつ建っている。塔の傍らに別の居室があり、そこに商務官や、さしあたりその任にあるモサンビークの警備隊長が住んでいる。この塔の傍らにりっぱな貯水槽がひとつあり、塔の下層はおおやけの牢屋となっている。この旧要塞のそばに施療院がひとつあり、当地でやまいを得た患者の癒しはすべてここで行なわれる。以上はただならぬ慈悲と熱心さをもって行なわれる。この病院の世話を行なうのはプロヴェドール<sup>10</sup>とミゼリコルディア<sup>11</sup>のイルマンたちであるが、病院にかかる経費

<sup>7</sup> ペーテル・ケリウス『モサンビークの島と要塞』参照。Santo Dominicus と見えるのがそれである。

<sup>8</sup> ペーテル・ケリウス『モサンビークの島と要塞』参照。S. Gabriel と見えるのがそれである。

<sup>9</sup> ペーテル・ケリウス『モサンビークの島と要塞』参照。ポルトガルの巨大なナウ船もしくはガレアン船と、漁をしているかのような小さな手漕ぎ船が描き込まれている。

<sup>10</sup> 原綴り Provedor. 物資の支給を担当する職務を担う者。この場合、Misericórdia と連結して用いられるところから、Presidente da junta administrativa de um estabelecimento de caridade (慈善施設を経営する部門の長)の意か(DPLP)。

<sup>11</sup> 原綴り Misericórdia. 通常 Santa Casa da Misericórdia (聖なる慈悲の家)の名で知られる。キリスト教の教理にのっとり貧者、病人、孤児などの救済を目的とする慈善施設。ミゼリコルディアは、ポルトガル「黄金期」の王マヌエル時代に起源を有し、ポルトガルの海外進出に伴い、ヨーロッパからアフリカへ、さらにアメリカ(ブラジル)、アジアの各地へ広まる。日本でも、日本人キリシタンによって 1583 年、貧者、病人、孤児などを救済するミゼリコルディアが長崎に設立さ

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試みは〔ポルトガル〕国王の負担だ。経費を支払うよう命ずるのは要塞に駐在するカピタンである。この病院の傍らにあるのがエスピリト・サント〔原綴り Spiritosanto。聖霊。三位一体の第三位〕の礼拝堂であり、もうひとつサン・アントニオの礼拝堂<sup>12</sup>が島の端っこにある。盛んな巡礼が行なわれ崇敬の対象であるこれらの礼拝堂は、いずれも海寄りに位置する。

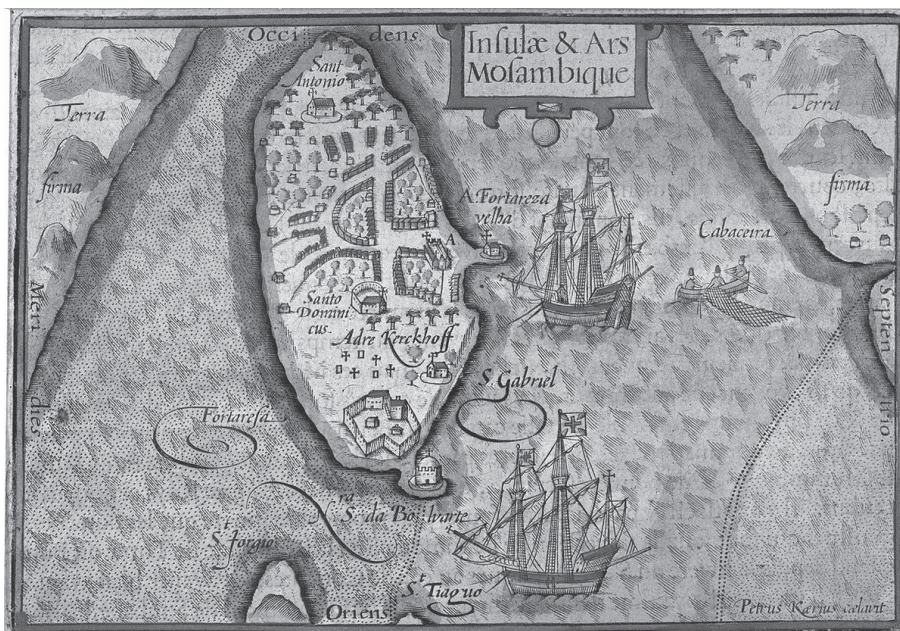
Nossa S. do Baluarte. /S. Domĩgos.

Fora da fortaleza de Moçambique, na ponta da ilha está ãa ermida da invocação de Nossa Senhora do Baluarte, o qual nome lhe puseram por respeito de ser a mesma igreja antigamente um baluarte, onde estava a artilharia pera defender a barra, antes que se fizesse a fortaleza; a qual igreja é de muita romagem, não somente dos moradores da terra, mas também dos mareantes que navegam por esta costa, assi de Portugal, como da Índia. Defronte desta fortaleza pola ilha dentro está um campo raso mui fermoso, que terá de comprimento mais de um grande tiro de mosquete, e outro tanto de largo, no fim do qual está o convento de S. Domingos, novo, e mui fermoso, sem haver nele outra casa mais que ãa ermida de S. Gabriel ao longo da praia, defronte da qual surgem as naus que vêm a este porto, assi de Portugal, como da Índia. Além do convento de S. Domingos vai correndo a povoação em que vivem os portugueses, e os mais cristãos da ilha, que serão por todos duas mil pessoas, pouco mais ou menos. Nesta povoação está a fortaleza velha, e nela a Sé antiga, e a casa da Misericórdia, que inda hoje servem. Em um pano do muro desta fortaleza velha está ãa fermosa torre de dous sobrados, com outros aposentos junto a ela, onde vive o feitor, e alcaide-mor de Moçambique, que polo tempo é. A ãa ilhargá desta torre está ãa boa cisterna, e nos baixos da torre a cadeia pública. Perto desta fortaleza velha está um hospital, onde se curam todos os enfermos que adoecem na terra, e os que vêm de fora a este porto, aasi da Índia, como de Portugal. O que se faz com muita caridade, e diligência. Deste hospital têm cuidado o Provedor, e Irmãos da Misericórdia, mas o gasto dele

---

れた。ルイス・フロイスは、来日まもない1567年頃、布教していた泉州堺で、海岸や濠の傍らに子が棄てられることを知り、収容させたうえ、コスメ・コーゼンという裕福なキリシタン商人が捨て子の代父になってくれるよう依頼する。コスメは喜んでその負託に応える。フロイスやコスメの行為はむしろ、ミゼリコルディアの精神にのっとるものであるが、堺のキリシタン数名はフロイスに対し、このような“慈悲”のわざには今後関わらぬように、こうして捨て子を救ってもらえるという噂が広まると、安易に子を棄てる親がますます増え、早晚収拾がつかなくなるから、という助言を与えたという。

é à custa d'el-Rei, que pera isso manda pagar o Capitão da fortaleza, como veador que é de sua fazenda nestas partes de Moçambique. A este hospital está junto ãa ermida do Espírito Santo, e no cabo da ilha outra de Santo António, de muita romagem, e devação, e ambas situadas ao longo do mar.



ゲント生まれの地図学者ピーテル・ファン・デン・ケール (Pieter van den Keere. ラテン名ペーテル・ケリウス Peter Kaerius. 1571- c. 1646) が描いた『モザンビークの島と要塞』(Insulæ & Ars Mosambique)。1597年。南北逆に印刷されているため、島の下端に描かれる N. S.<sup>ra</sup> da Boluarte (Nossa Senhora do Baluarte) 礼拝堂が位置するのは島の北端。サントスによって言及される S. Gabriel (礼拝堂) や Santo Dominicus (礼拝堂)、さらに A Fortaleza (Fortaleza) velha の書き込みもよく確認できる。島の中央やや左寄りに、Fortaleza (要塞) とのみ見えるが、これこそが、サントスが「島の要塞」と呼ぶサン・セバスティアン要塞にほかならない。

### ムスリムの集落

この島にはまた別にイスラム教徒の集落がある。その集落はキリスト教徒の集落からは隔てられている。その間隔はおおよそエスピナルダ銃の2射程分に相当する。キリスト教徒の部落にはごく僅かしかイスラム教徒はおらず、彼らの大半は貧しく零細な水夫たちだ。彼らは日

<sup>12</sup> ペーテル・ケリウス『モザンビークの島と要塞』参照。Sant Antonio と見えるのがそれである。

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

常に島のキャプテンやポルトガル人に召し使われており、ポルトガル人の味方だ。ポルトガル人に恭順を装ってはいるが、それはポルトガル人を怖れてのことであり、そうでなければ、ポルトガル人に依存するところがあるからだ。

#### Pouoaçã de Mouros.

Está também nesta ilha outra povoação de mouros, apartada da dos cristãos obra de dous tiros d'espingarda, pouco mais ou menos, na qual vivem poucos mouros, e estes pola mor parte são marinheiros, pobres, e misquinhos, e ordinariamente andam no serviço do capitão, e dos portugueses, dos quais são amigos, e mostram-se-lhes leais, ou por medo, ou porque sempre dependem delas.

#### ティタンゴーネの泉

この島は乾燥がひどく、飲料に適する淡水はなく燃やす薪<sup>まき</sup>もない。飲料水は入り江の外、およそ 3 レグアにあるひとつの泉から海伝いにもたらされる。その泉は、ティタンゴーネと呼ばれるある湾の中にあり<sup>13</sup>、この泉はカレイラ・ダ・インディア<sup>14</sup>で働くあらゆる水夫のあいだで評判がよくかつ高名である。それは、この泉の湧き水がおいしいためであり、ポルトガルおよびインディアからやってくるナウ船なら、必ずそこで水の補給を行なうからだ。この泉に隣接してその昔、ムスリムの集落があった。このイスラム教徒たちを制圧し、かつモサンビークの砦に服属させたのは、キリンバ島から渡来したアントニオ・ガルヴァンであった。アントニオ・ガルヴァンはキリンバ島に暮らしていたムスリムをも制圧下に置いた。それは主の年 1522 年のこと。ところが今や、キリンバには漁師が暮らす貧しげな茅屋<sup>ぼうおく</sup>が数軒あるだけだ。この島で燃やす薪<sup>まき</sup>は、正面に広がる大陸側からもたらされる。島と大陸との間隔は、あるところでは 1 レグア、あるところでは半レグアに満たない。大陸側にもこの島(キリンバ)にも豊かなヤシ畑があり、

---

<sup>13</sup> CNCDP 版校訂本(前掲)の注釈者によると、“Titangone” とは、おそらくコンドゥシーア湾 (baía de Conducia) のことであろうという (p.257, nota 191)。この湾はモサンビーク島の北、岬をひとつ隔てたその北に広がる。サントスの表現によれば、その泉はティタンゴーネと呼ばれる湾の中にある、とのことであるが、むろん湾沿いの陸地のどこか、という意味であろう。ヨアン・ブラウ『アトラス・マイオール』には、モサンビークのすぐ上に “Quitangone” の地名が確認できる。指呼の間にあるこの土地で良質な飲み水が得られたことは、モサンビーク島にとり大きな天恵であったろう。

<sup>14</sup> 大航海時代、ポルトガル本国と東方植民地たるインディアを結び、ナオ(ナウ)やガレアン(ガレオン)などの大型帆船がゆき交った往路・復路のルート。

これが大きな利益をもたらす。ヤシは、酒やココの実をどっさりもたらしてくれるのだ。<sup>そさい</sup>蔬菜やオレンジやシトロン<sup>シドドラ</sup>〔マルブシュカン〕、おいしいライムやザクロ<sup>リマ</sup>の実がふんだんにあり、ポルトガルやインディアにあるのと変わらぬイチジク<sup>フィグイラ</sup>の木やブドウ<sup>バレイラ</sup>の木、パイナップル<sup>アナナース</sup>や、すこぶる美味な果物が数種、林にたっぶり自生する。

#### Fonte de Titãgone.

Toda esta ilha é muito seca; não tem água doce pera beber, nem lenha pera queimar. A água lhe vem por mar de ãa fonte que está fora da barra daí a três léguas, em ãa baía chamada Titangone, mui nomeada, e conhecida de todos os marinheiros da carreira da Índia, pola bondade de suas águas, e porque nela fazem aguada todas as naus de Portugal, e da Índia. Junto a esta fonte esteve antigamente ãa povoação de mouros, os quais sejeitou, e fez obedecer à fortaleza de Moçambique António Galvão, vindo da ilha de Quirimba, onde também sujeitou os mouros que nela moravam, que foi no ano do Senhor de 1522, mas já hoje não estão neste lugar mais que algũas pobres casinhas de pescadores. A lenha que se queima nesta ilha vem da terra firme que está defronte, em partes ãa légua, e mais, e em outras muito menos de meia légua. Nesta terra firme, e dentro na mesma ilha há muitos palmares mui ricos, e proveitosos, que dão muito vinho, e cocos. Tem algũas hortas de hortaliça, laranjas, cidras, muitas, e boas limas, romeiras, figueiras de Portugal, e da Índia, parreiras, e muitos ananases, e algũas frutas do mato muito boas.

#### モサンビークの飼養動物/モサンビークに供給される物資

大陸側の林にはパウ=プレット〔黒檀〕の木が数多くあり、モサンビークの住民は大量にそれを採取する。そしてそれをインディアやポルトガルへ赴く人々に売る。大陸側ばかりでなくモサンビーク島において、ブタやヤギやニワトリの飼養が盛んに行なわれる。これによってそこへ立ち寄る本国〔ポルトガル〕のナウ船〔の乗員〕は元気を取り戻す。ナウ船はさらに、ありとあらゆる<sup>さば</sup>蔬菜、現地の清涼飲料、カフル人の補給を受ける。彼らはそこで安価に売り捌かれる。島では、ブドウ酒やオリーブ油、チーズやオリーブの実、それにマルメラード<sup>15</sup>、さらに、ポル

---

<sup>15</sup> 原綴り marmelada. *PDLP* によると、マルメロ(marmelo)の実を用いてつくる砂糖漬け。学名 *Cydonia oblonga* からマルメロの和名を得た。



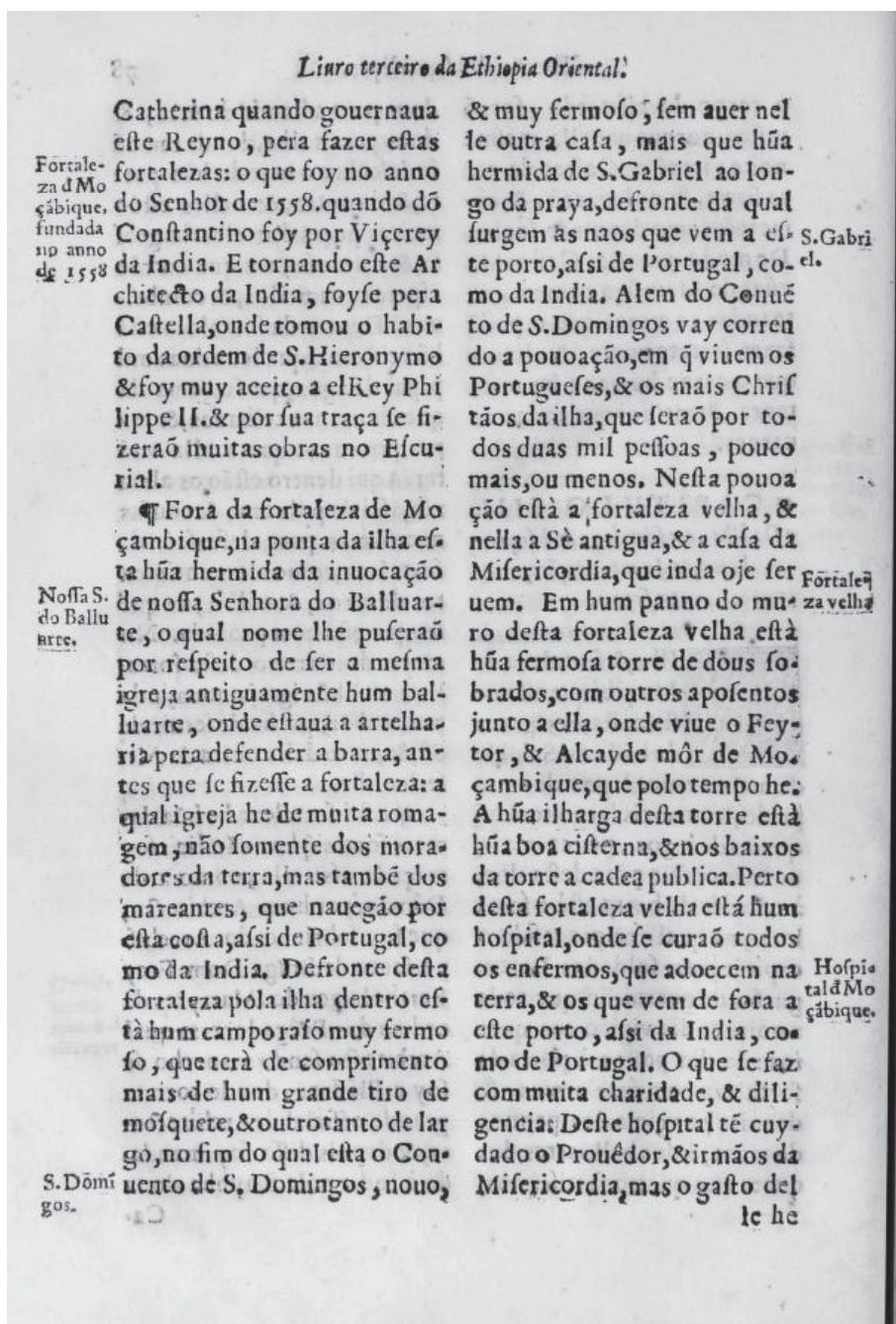
ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み  
トガルからやってきてインディアへ向かうものいっさいの補給が行なわれる。それ以外の  
補給物資も、毎年インディアからこの島へもたらされ、そしてここから、あたりの海岸全域の土地へと散ってゆく。小麦粉や布地、数珠や衣裳、それに履き物がそうだし、そのほか雑多な商品、かの諸地方[モサンビーク周辺]に産しない必需品がそうだ。ポルトガル人が住みはじめた頃この島は不健康な土地であった。彼らの多くがやまいに斃れて島に葬られているが、デウスの御好意により、今は以前より健康的だ。



フランスの博物画家パンクラーズ・ベッサ (Pancrace Bessa. 1772～1835)が描いたマルメーロ。和名マルメロの学名 *Cydonia oblonga* の画像を Botanical Illustrations というサイトで検索、そこからパンクラーズ・ベッサの作品を選択した。

Creações de Moçãbique. /Prouimêto de Moçãbique.

Nos matos da terra firme há muitas árvores de pau-preto, de que os moradores de Moçambique colhem grande quantidade, que vendem aos que vão pera a Índia, e pera Portugal. Nesta terra firme, e também na ilha, há criações de porcos, cabras, e galinhas, das quais se refazem as naus deste Reino, quando ali vão ter, e de todos os mais legumes, e refresco da terra, e de cafres, que ali se vendem baratos; e a ilha fica provida de vinhos, azeites, queijos, azeitonas, marmeladas, e de tudo o mais que vai de Portugal pera a Índia. Todo o mais provimento lhe vem da Índia cada ano, e daqui vai pera as mais partes de toda esta costa, como são farinhas, roupas, contas, vestido, e calçado, e todas as mais mercadorias, e cousas necessárias que não há naquelas terras. Esta ilha logo no princípio, quando foi povoada polos portugueses, era mui doentia: e assi estão nela enterrados muitos milhares deles, mas já agora pola bondade de Deus é mais sadia.



p.78v. 左段。Fortaleza de Moçambique, fundada no anno de 1558.〔1558年に建設されたモサンビークの要塞〕/Nossa S. do Baluarte.〔ノッサ・セニョーラ・ド・バルアルテの礼拝堂〕/ S. Domingos.〔サン・ドミンゴス修道院〕

右段。S. Gabriel.〔サン・ガブリエールの礼拝堂〕/ Fortaleza velha.〔旧要塞〕/ Hospital de Moçambique.〔モンビークの施療院〕

le he à custa del Rey, que pera isso manda pagar o capitão da fortaleza, como Veador que he de sua fazenda nestas partes de Moçambique. A este hospital está junta hũa hermidã do Spiritosanto, & no cabo da ilha outra de S. Antonio de muita romagem, & deuãção, & ambas situadas ao longo do mar.

Pouoaça  
de Mouros.

¶ Está també nesta ilha outra pouoação de Mouros apartada da dos Christãos obra de dous tiros d'espingarda, pouco mais, ou menos, na qual vivem poucos Mouros, & estes pola môr parte são marinheiros, pobres, & misquinhos, & ordinariamente andão no feruço do capitão, & dos Portugueses, dos quaes são amigos, & mostra ôselhe leaes, ou por medo, ou porque sempre depêdem delles.

Fonte de  
Titãgõ-  
nc.

¶ Toda esta ilha he muito seca; não té agoa doce pera beber, nem lenha pera queimar. A agoa lhe vê por mar de hũa fonte, q̄ está fora da barra dahi a tres legoas, em hũa baía chamada Titãgõnc, muy nomeada, & conhecida de todos os marinheiros da carreira da India, pola bõdade de suas agoas & porque nella fazem agoada

todas as naos de Portugal, & da India. Iunto a esta fonte ef teue antiguamête hũa pouoação de Mouros, os quaes sojeitou, & fez obedecer à fortaleza de Moçambique Antonio Galuão vindo da ilha de Quirimba, onde tambem sojeitou os Mouros q̄ nella morauão, q̄ foy no anno do Sñor de 1522. mas já oje não estão neste lugar mais que algũas pobres caílinhas de pescadores. A lenha que se queima nesta ilha vem da terra firme, que está defronte, é partes hũa legoa, & mais, & em outras muyto menos de meya legoa. Nesta terra firme & dentro na mesma ilha há muytos palmares muy ricos, & proueitofos, que dão muito vinho, & cocos. Tem algũas hortas de hortaliça, laranjas, cidras, muytas & boas limas, romeiras, figueyras de Portugal, & da India, parreiras, & muytos ananazes, & algũas fruytas do mato muyto boas:

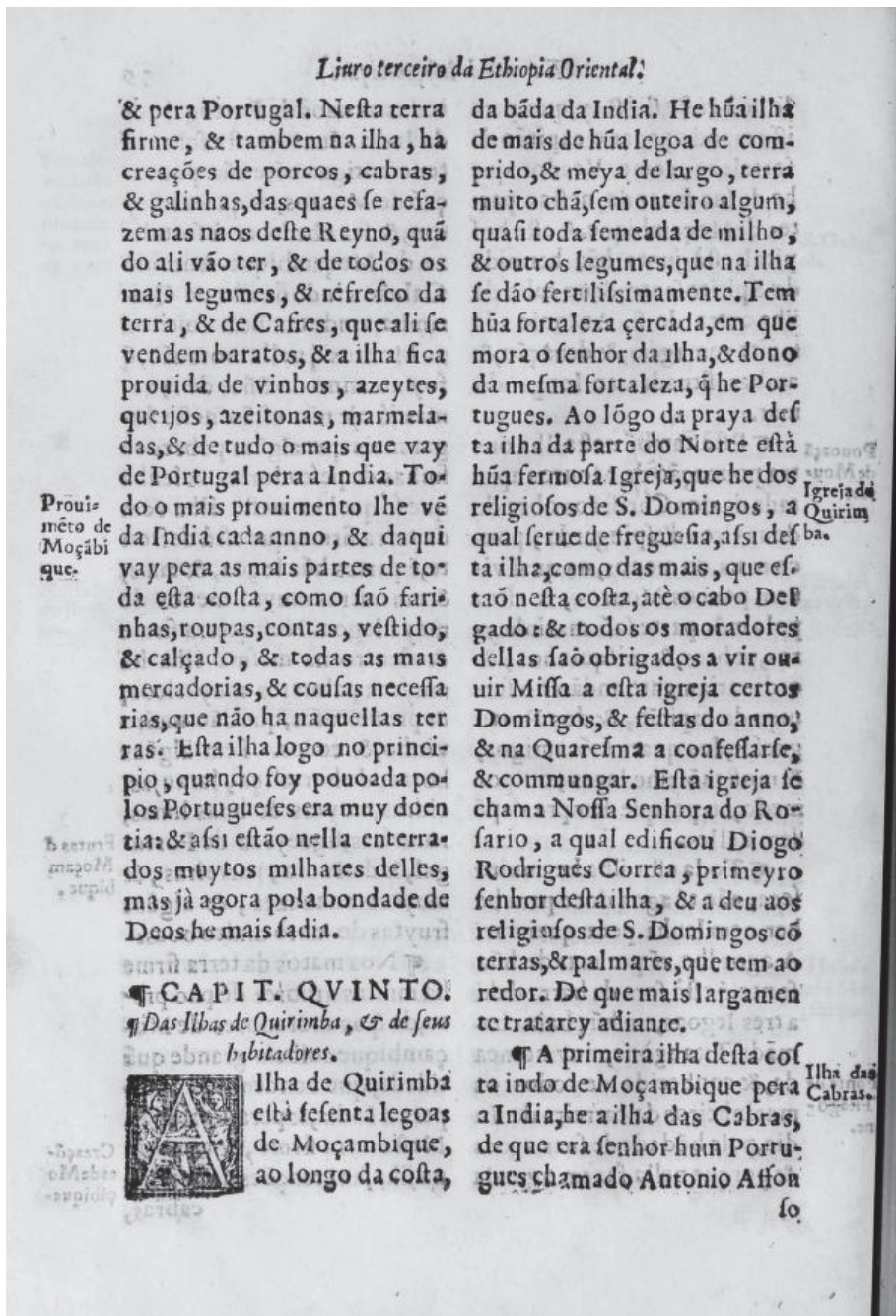
Frutas de  
Moçambique.

¶ Nos matos da terra firme ha muitas aruores de pao preto, de q̄ os moradores de Moçambique colhem grande quantidade, que vendem aos q̄ vão pera a India, & pera Portugal. Nesta terra firme, & tambem na ilha, ha creações de porcos, cabras,

Creações  
de Moçambique.

p.79. 左段. Pouoaça de Mouros. [ムスリムの集落] / Fonte de Titãgone. [ティタンゴーネの泉]

右段. Frutas de Moçambique. [モサンビークの果実] / Creações de Moçambique. [モサンビークの飼養動物]



p.79. 左段. Prouimêto de Moçambique. [モサンビークに供給される物資]

右段. Igreja de Quirimba. [キリンバの教会]/ Ilha das Cabras. [ダス・カブラス島]

## CAPÍTULO V (Primeira Parte, Livro Segundo)

### Das ilhas de Quirimba, e de seus habitantes.

#### 第5章(第一部第3巻)

##### キリンバの諸島とその住民について

##### キリンバの教会

キリンバの島<sup>16</sup>はモサンビークから60レグア<sup>17</sup>、海岸に沿うようにインディアの側に〔面して〕位置する。長さは1レグア以上、幅は半レグア、土地は非常に平らかで丘陵ひとつさえない。ほぼ全島にわたってミーリョ<sup>18</sup>や、そのほか<sup>そさい たね</sup>蔬菜類の種が播かれ、それらがたいそう豊かに収穫される。キリンバ島には〔壁に〕囲まれた<sup>フォルタレーザ</sup>要塞がひとつあり、その中に、島のあるじで同要塞の持ち主が住む。これはポルトガル人である。この島の北寄りの浜沿いに、美しい<sup>イグレジャ</sup>教会がひとつあり、サン・ドミンゴス〔ドミニコ会〕の修道僧によって管理される。この教会はまた、この島のみならず、海岸沿いにカーボ・デルガードまで連なる、そのほかの島々の<sup>フレグジーア</sup>教区教会の機能も果たす。キリンバ島の住民は皆、一年のうち所定の日曜・祝日に教会へやってきて、ミサを聴聞する義務を負う。クワレズマ〔四旬節〕には告解を行なうとともに、聖体拝領にあずからねばならない。教会はノッサ・セニョーラ・ド・ロザリオ〔ロザリオの聖母〕と呼ばれ、ディオゴ・ロドリゲス・コレイアが建立したものの。同島の初めてのあるじディオゴ・ロドリゲス・コレイアが、この教会をサン・ドミンゴス〔ドミニコ会〕の修道僧へ与えたのだ。教会といっしょに贈られたのが周辺の土地とヤシ畑であった。これらについては、より詳しく後述されるだろう。

##### Igreja de Quirimba.

A ilha de Quirimba está sessenta léguas de Moçambique, ao longo da costa, da banda da Índia. É ùa ilha de mais de ùa légua de comprido, e meia de largo, terra muito chã, sem outeiro

<sup>16</sup> 原語 Ilha de Quirimba. キリンバ島を初めとするキリンバス諸島は、現、モサンビーク共和国北東部カーボ・デルガード州に属し、イーボ、マテーモ、ローラスなど、およそ 32 の島々が海岸寄りに連なる。16 世紀半ばのフェルナン・ヴァス・ドウラードの地図にはモサンビーク島の北側に辛うじて J[lha] de Quiriba と読める地名が見える。17 世紀半ばをすぎた制作されたヨアン・ブラウ『アトラス・マイオール』には、キリンバの島がよりはっきりと描かれる。

<sup>17</sup> 原語 sesenta legoas. レグア(レゴア)は、大航海時代のポルトガルやイスパニアで用いられた距離単位。年代と場所により多少の差異があるが、当時のポルトガルではおよそ 5 キロメートル。

<sup>18</sup> 原綴り milho. 通常トウモロコシをさす語彙であるが、ここではソルガムであろう。

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

algum, quasi toda semeada de milho, e outros legumes, que na ilha se dão fertilissimamente. Tem ãa fortaleza cercada em que mora o senhor da ilha, e dono da mesma fortaleza, que é português. Ao longo da praia desta ilha, da parte do norte, está ãa fermosa igreja, que é dos religiosos de S. Domingos, a qual serve de freguesia, assi desta ilha, como das mais que estão nesta costa até o Cabo Delgado; e todos os moradores dela são obrigados a vir ouvir missa a esta igreja certos domingos, e festas do ano, e na Quaresma a confessar-se, e comungar. Esta igreja se chama Nossa Senhora do Rosário, a qual edificou Diogo Rodrigues Correia, primeiro senhor desta ilha, e a deu aos religiosos de S. Domingos com terras, e palmares que tem ao redor, de que mais largamente tratarei adiante.

**ダス・カブラス島 /フンボ島 /キリンバ島 /イーボ島 /マテーモ島 /マコロエー島 /シャ  
ンガ島 /マリンデ島 /カーボ・デルガード島 /カササギの小島**

モサンビークからインディアへ向かうとき、当海岸で最初〔に出会う〕島は、ダス・カブラス島である。この島を領していたのは、アントニオ・アフォンソという名のポルトガル人であった。それは、私がこれらの島々で活動していたときのこと。主の年1592年であった。この島のすぐ前方にあるのが第二の島であり、フンボと呼ばれる。マテウス・メンデスというポルトガル人が当時、この島のあるじであった。第三の島は、フンボ島より先へ進むこと2レグアにある。美しいキリンバ島がそれだ。この島を領していたのは、先述したディオゴ・ロドリゲス・コレイアの子らである。第四の島はキリンバ島から隔たること1レグアにあり、イーボと呼ばれ、別のポルトガル人がこの島のあるじであった。イーボ島から隔たること3レグアに大きな島がひとつあり、これがマテーモと呼ばれる第五の島だ。ここには昔、ムスリムの一大集落があり、その廃墟が今も往昔の記憶をとどめる。〔廃墟にはムスリムの暮らしていた〕家々が玄関や窓とともに残され、巧みに彫琢ちやうたくされた列柱が家々を飾っている。こうしたものすべてを破壊したのがポルトガル人であった。彼らはこれらの土地土地を制圧し、ムスリムからそれらを奪い取り、島々の住民とたび重なる争いを繰り返していたのだ。そうした争いのさなか、私はその地に滞在していたのだが、この島の岸辺をゆき交った初期のポルトガル人のことをよく憶えているムスリムが幾人かいた。彼らはまた、和平と友好を望まぬ土地の原住民に対しポルトガル人が示した残酷性も、記憶にとどめていた。原住民に対しポルトガル人はいとも大いなる懲罰を実行に移し、

誰にも死を免れさせなかった。女や子どもに対しても同様であった。マテーモ島を当時領していたのはポルトガル人ロウレンソ・ヴァス・デ・カルヴァーリョであった。ここから隔たること 4 レグアに第六の島があり、これをマコロエと呼ぶ。当時この島を領していたのはジョアン・エスターシオであった。そこからさらに 4 レグア進むと、シャンガと呼ばれる第七の島がある。この島のあるじもポルトガル人で、名をドミンゴス・カセーラという。この島の向こう、およそ 2 レグアのところに、マリンデと呼ばれる別の島がある。この島のあるじはムスリムで、名をムイニエ・ファルメーという。この島に近接することおよそ 1 レグア、ふたつの島がほぼ寄り添うように存在し海〔の彼方〕へ延びている。うちひとつの島の主はマノエル〔マヌエル〕・ゴメスというポルトガル人であり、いまひとつはマノエル〔マヌエル〕・フレイレというポルトガル人が領する。これらの島々からカーボ・デルガードまで 4 レグアの隔たりがあり、そこに〔モサンビークから数えて〕最後の島がある。名をカーボ・デルガード島という。この島の主はポルトガル人ジョルジェ・デ・バロス・ボテーリョであった。そのほか小島がかずかず海岸沿いに、上述の島々のあいだに点在するのだが、無住の地であるからそれらは列挙しない。ただそうした無人島のひとつにローラス〔カササギたち〕の小島と呼ばれるものがある。そこでは来る年も来る年も、カササギが大繁殖する。上述の島々にはミーリョ〔ソルガム〕の種が蒔いてあるのだが、カササギはそれに大損害を与える。だからカササギの繁殖期が来ると、他の島々の住民はこぞってローラスの小島へ移ってくる。ひな鳥を殺し卵を潰すためだ。見つけ次第〔殺した〕ひな鳥を、彼らは持ち込んだ袋へぎゅうぎゅうに詰め込むのだが、それでも無限にカササギがいる、という状況を断ち切るには不十分だ。

Ilha das Cabras. /Fumbo. /Quirimba. /Ibo. /Matêmo. /Macoloè. /Xanga. /Malinde. /Cabo Delgado. /Ilheo das Rolas.

A primeira ilha desta costa, indo de Moçambique pera a Índia, é a ilha das Cabras, de que era senhor um português chamado António Afonso, no tempo que eu andava nestas ilhas, que foi no ano do Senhor de 1592. Logo adiante desta está a segunda ilha, chamada Fumbo, de que então era senhor Mateus Mendes, português. A terceira ilha está duas léguas adiante desta, a qual é a fermosa ilha de Quirimba, de que são senhores os filhos de Diogo Rodrigues Correia, de quem agora falei. A quarta ilha está ãa légua de Quirimba, chamada Ibo, de que era senhor outro português. Daí a três léguas está ãa grande ilha, que é a quinta, chmada Matemo, onde



ジョアン・ドス・サントス『エティオピア・オリエンタール』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

antigamente houve ã grande povoação de mouros, cujas ruínas o mostram inda hoje, porque tem os portais, e janelas de muitas casas guarneçidos de colunas bem lavradas. O que tudo destruíram os portugueses, quando foram conquistando, e tomando estas terras aos mouros, tendo muitas brigas com os moradores destas ilhas. Nas quais, inda no tempo que eu aí estive, havia mouros que se lembravam dos primeiros portugueses que passaram por esta costa, e da crueldade de que usaram com os naturais da terra, que não queriam paz, e amizade com eles, nos quais executaram tão grande castigo que a nenhum perdoaram a morte, nem ainda a mulheres, e mininos. Desta ilha Matemo era então senhor Lourenço Vaz de Carvalho, português. Daqui a quatro léguas está a sexta ilha, a que chamam Macoloé, de que neste tempo era senhor João Estácio. Daí a outras quatro léguas está a sétima ilha, chamada Xanga, de que era senhor outro português chamado Domingos Cacula. Além desta, obra de duas léguas, está outra chamada Malinde, de que era senhor um mouro chamado Muinhe Falumé. Junto da qual, obra de ã légua, estão duas ilhas quasi juntas que vão correndo ao mar, ã de um português chamado Manuel Gomes, e outra d'outro chamado Manuel Freire. Destas ilhas ao Cabo Delgado são quatro léguas, onde está a derradeira, chamada do Cabo Delgado, de que era senhor Jorge de Barros Botelho, português. Outros ilheus estão nesta costa por entre as ilhas nomeadas, os quais não aponto aqui por serem despovoados; a um deles chamam o ilheu das Rolas, pola grande criação que ali há delas todos os anos, e fazem grande dano nos milhos, de que todas estas ilhas se semeiam. Polo que no tempo de sua criação se vão os moradores das outras ilhas a esta, a destruir-lhes os ninhos, e quebrar-lhes os ovos, e dos filhos pequenos que acham trazem sacos cheios, mas nem isto é bastante pera deixarem de ser infinitas.

#### キリンバ島などのムスリムが差し出す貢物

上記の島々にはムスリムが住む部落がひとつずつある。彼らの大半は細々とした暮らしを営み、貧しくみずからの住む島々の領主に強く従属している。彼らはこの領主に対し毎年貢ぎ物を納める。貢ぎ物とは彼らがそれぞれの島で種を蒔き収穫するものすべての20分の1<sup>19</sup>。

---

<sup>19</sup> このくんだり、原文からは真意を把握しがたい。意味を汲みつつ訳さざるを得ず訂正の余地を残しておく。

このほかに彼らは十分の<sup>デュージモ</sup>一税を我らの[カトリック]教会へ支払う。

Tributo que pagão os Mouros destas ilhas.

Em cada ilha destas há ùa povoação de mouros, os mais deles misquinhos, e pobres, mui sujeitos aos senhores das ilhas, em que moram, a quem pagam tributo cada ano, que é de tudo o que semeiam, e colhem na sua ilha de vinte um, afora o dízimo, que pagam à nossa igreja.

### 中風を治癒する方法/中風に対するもうひとつの対処法

列挙してきた島々はすべてすこぶる健康的な土地柄であり、心地よい大気に恵まれている。なかんずくキリンバ島、カーボ・デルガード島、そしてダス・カブラス島がそうだ。ただしこうした島々でさえ、多くの人——特に老人と子ども——が中風<sup>ちゅうふう</sup>で命を落とす。島々の大気が身体を突き刺すような性質を有するからだ。このやまいに対処するため彼らは多くの療法を有しており、実際それらによって治すすべを心得ている。彼らにすれば、平生の、ありふれたやまいにすぎぬ。第一の治癒法は、中風の症状が出た人をただちに<sup>くんじょう</sup>燻蒸してやるというもの。そのとき用いるのはゾウの糞、<sup>モスタルダ</sup>カラシナ、<sup>たね</sup>ニンニクの皮、一種の種で彼らがインゴと呼ぶもの。これは未熟なヒロハルンリソウ[の実]<sup>20</sup>のようなもので、不快な匂い<sup>にお</sup>を放つ。これらすべてをいっしょにして<sup>おきび</sup>熾火に放置し、日に2〜3度、患者をゆっくり<sup>いぶ</sup>燻してやる。この療法を4〜5日継続してそれが終わる頃、半カナダのオリーブ油<sup>21</sup>、ブドウで出来た<sup>ヴィーニョ・ブランコ</sup>白ワイン1クアルティリーヨ<sup>22</sup>、粉々に砕いたチナの木1クアルタと少々<sup>23</sup>を原料とする、効

<sup>20</sup> 原語 sizerão verde. 現代綴りの cizirão を *Grande Enciclopédia Portuguesa e Brasileira* (Lisboa/Rio de Janeiro, Editorial Enciclopédia, s.d.) で調べ、学名 *Lathyrus latifolius* を得た。これを『かぎけん花図鑑』というサイトで検索すると、以下のような基本情報にたどり着く。マメ科ハマエンドウ属の蔓性多年草(宿根植物)。和名、ヒロハルンリソウ(広葉連理草)、別名、シュツコン(宿根)スイートピー。欧州原産で、日本にも帰化している。花に芳香はない。マメ科であるから実であるマメができる。テキストには verde という形容詞が用いられているから、白ないし桃色の花びらではなく、未熟な(緑色の)実のようなもの、と言いたいのであろう。

<sup>21</sup> 原語 meya canada de azeite de oliueira. *PDL*によると、葡萄酒の計量単位で、カステイーリャ語の cañada (カニャーダ)に由来。ポルトガルで用いられた液体計量の古い単位。1カナダは4クアルティリーヨもしくは2リットルに相当。したがって半カナダは約1リットル。

<sup>22</sup> 原語 hũ quartilho de vinho branco de vuas. 前注から明らかなおと、カナダの4分の1。したがって500ミリリットル。

<sup>23</sup> 原語 pouco mais de hũa quarta de pao da China. 「チナの木」は竹である可能性あるが、未詳。クアルタとは容量単位アルケイレの4分の1。オリーブ油の計量単位としてのアルケイレは6カナダすなわち約12リットル。その4分の

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試みに優れた一種の塗り薬をつくる。これを火で煮つめると、やがてブドウ酒がなくなり、1 クアルティリーヨのオリーブ油が残る。そこへ美しい蜜蠟を少し入れ、凝固を待つと、〔最終的な〕塗り薬のできあがり。これを朝、正午、夜と、中風を患った箇所全体に塗る。すると短時間で患者は回復する。ひとたび治るとすっかり元気になり、もともと中風知らずであったかのようだ。

別種の薬も使われ、これにも優れた効き目がある。これはある種しゅの木の根っこであり、コトと呼ばれる。この根っこを粉ひに挽きぬる湯ぬる湯ぬに溶かしそれを患部に塗ると、短期間のうちにやまいは癒える。



ヒロハノレンリソウ。学名 *Lathyrus latifolius*。

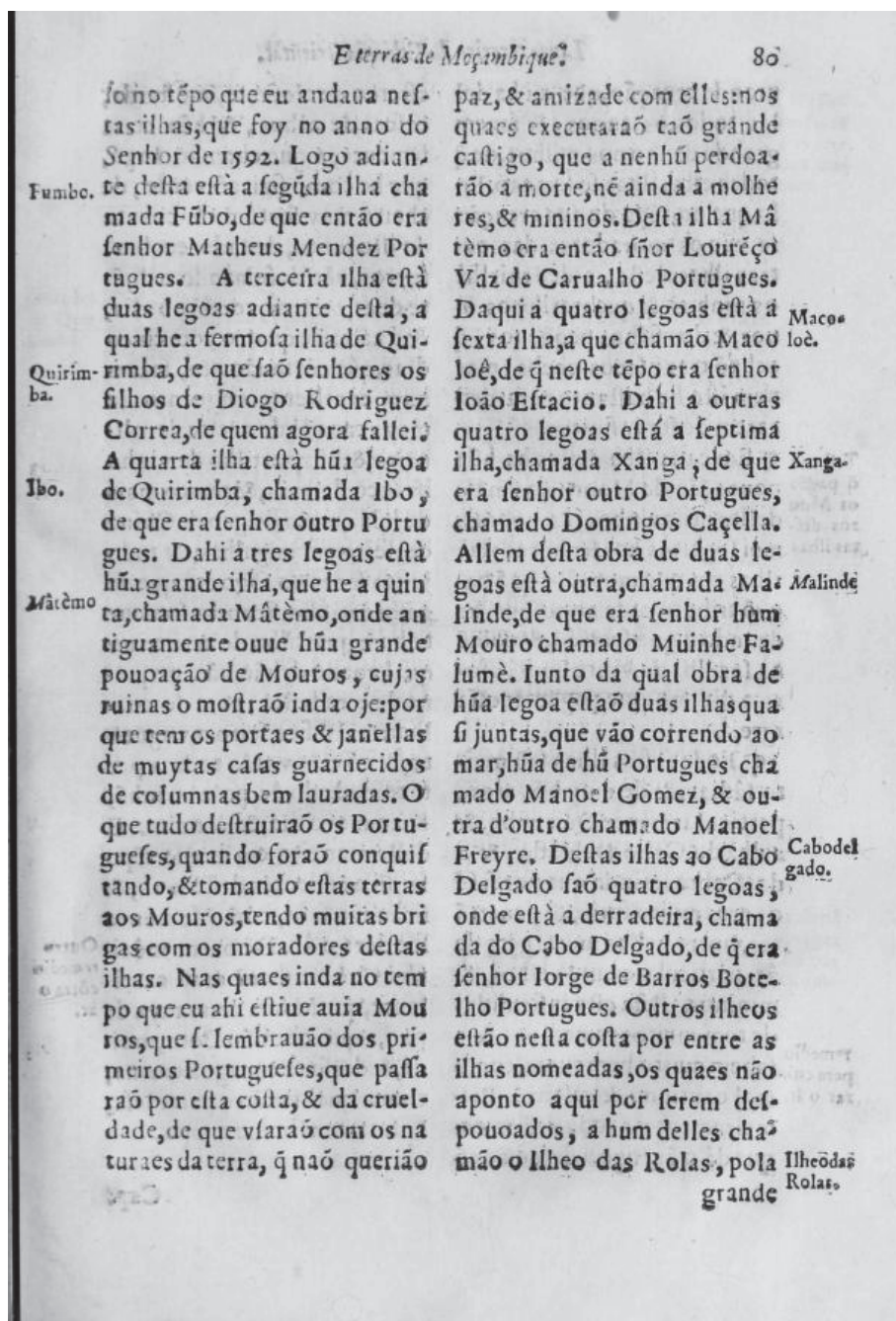
Remedio pera curar o âr. /Outro remedio cõtra o âr.

Todas estas ilhas são muito sadias, e de mui bons ares, particularmente Quirimba, e a ilha do Cabo Delgado, e a das Cabras; ainda que por serem os ares muito sutis, e penetrantes, morre nelas muita gente de ar, particularmente velhos, e mininos. Pera esta infirmitade têm muitos remédios, e a sabem muito bem curar, como mal contínuo, e caseiro. Primeiramente, a toda pessoa em que da o ar, logo a defumam com esterco de elefante, mostarda, cascas de alhos, e ãa certa semente a que chamam *ingo*, que é como cizirão verde, de cheiro mui fortun. E com tudo isto junto, deitado em braseiros, vão defumando o doente duas, ou três vezes no dia, e a cabo de quatro, ou cinco dias que continuam isto, fazem um excelente unguente de meia canada de azeite de oliveira, e um quartilho de vinho branco de uvas, e pouco mais de ãa quarta de pau da China desfeito em

---

1 であるから、ここは約3リットルとなる。

migalhas, e tudo junto ferve no fogo até que se gasta o vinho, ficando somente um quartilho de azeite, no qual coado deitam ãa pequena de cera bela pera se coalhar: e assi fica feito o unguente, e com ele untam toda a parte tomada do ar, pola manhã, e ao meio-dia, e à noite. E desta maneira, em breve tempo saram os doentes deste mal, e ficam tão sãos como se nunca lhes dera o ar. De outra mezinha usam também, mui excelente, que é ãa certa raiz de pau, a que chamam *coto*, moída, e desfeita em água morna, com a qual untam a parte lesa, e saram em breve tempo.



p.80. 左段. Fumbo.〔フンボ島〕/ Quirimba.〔キリンバ島〕/ Ibo.〔イーボ島〕/ Matêmo.〔マターモ島〕

右段. Macolô.〔マコロエー島〕/ Xanga.〔シャンガ島〕/ Malinde.〔マリンデ島〕/ Cabo Delgado.〔カーボ・デルガード島〕/ Ilheodas Rolas.〔カササギの小島〕

grande criação, que ali ha del las todos os annos, & fazem grande danno nos milhos, de q̄ todas estas ilhas se semeaõ. Po lo que no tẽpo de sua criação se vão os moradores das ou tras ilhas a esta, a destruilhe os ninhos, & quebrarlhe os o uos, & dos filhos pequenos, q̄ achaõ trazẽ sacos cheos, mas nem isto he bastante pera dei xarem de ser infinitas.

**Tributo q̄ pagão os Mouros destas ilhas**  
¶ Em cada ilha destas ha hũa pouoação de Mouros, os mais delles misquinhos, & pobres, mui sogeitos aos senhores das ilhas em que moraõ, a que pa gão tributo cada anno, que he de tudo o que semeaõ, & colhẽ na sua ilha de vinre hum, afo ra o dizimo, que pagão à nossa igreja.

¶ Todas estas ilhas saõ mui to sãdias, & de muy bõs ares, particularmente Quirimba, & a ilha do Cabo Delgado, & a das Cabras; ainda que por serẽ os ares muito sotis, & penetã tes, morre nellas muita gẽte de ar, particularmente velhos, & mininos. Pera esta infirmida de tem muitos remedios, & a sabem muito bem curar, como mal continuo, & caseiro. Pri meiramente, a toda pessoa em que dã o ar, logo a defumão cõ

esterco de elefante, mostarda, cascas de alhos, & hũa certa semente, a que chamãõ Ingo, que he como sizerãõ verde, de cheiro muy fortũm. E com tu do isto junto, deitado em bra seyros, vão defumando o doẽ te duas, ou tres vezes no dia, & a cabo de quatro, ou cinco dias, que cõtinuãõ isto, fazem hum excellente vnguento de meya canada de azeite de oli ueira, & hũ quartilho de vinho branco de vuas, & pouco mais de hũa quarta de pao da China desfeito em migalhas, & tudo junto ferue no fogo atẽ que se gasta o vinho, ficando somen te hum quartilho de azeite: no qual coado deitãõ hũa peque na de cera bella, pera se coa lhar; & assi fica feito o vnguen to, & cõ elle vntãõ toda a par te tomada do ar pol'a manhã, & ao meyo dia, & à noite. E desta maneira em breue tẽpo faraõ os doentes deste mal, & ficãõ tão saõs, como se nunca lhe dera o ar. De outra mẽzi nha vsãõ tambem muy excel lente, que he hũa certa rayz de pao, a que chamãõ Coto, moi da, & desfeita em agoa morna, com a qual vntãõ a parte lesa, & faraõ em breue tempo.

Cap:

p.80v. 左段. Tributo que pagão os Mouros destas ilhas. [キリンバ島などのムスリムが差し出す貢物] / Remedio pera

curar o ar. [中風を治癒する方法]

右段. Outro remedio cõtra o ar. [中風に対するもうひとつの対処法]

ジオアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み



ヨアン・ブラウ『アトラス・マイオール』に描かれるモザンビーク。2頭のゾウが見えるのは、モザンビークに象牙の産地というイメージがあったからであろう。図の右上にキンバ島がはっきり描かれ、“Quiriba”と読める。Joan Blacu, *Atlas Maior* 1665. «El Mejor Atlas y el Más Grande Jamás Publicado» より。